

『パンとぶどう酒』冒頭の都市像

高橋 克己  
人文学部独文研究室

内容梗概

序論 一(21)頁―三(23)頁  
本論 一(21)頁―三(23)頁

(一) 市街の外延

(1) 都市と農村 四(24)頁―五(25)頁  
(2) 農業の世紀 五(25)頁―七(27)頁

(二) 都市

(1) 市壁の内側 七(27)頁―八(28)頁  
(2) 城塞都市 八(28)頁―一(31)頁  
(3) 首都シュトゥットガルト 一(31)頁―三(33)頁

(三) 市民

(1) 市民生活 一三(33)頁―二二(42)頁  
(2) Breuchung 二二(42)頁―二九(49)頁  
(3) 祝祭とオペラ文化 二九(49)頁―三五(55)頁  
(4) 変貌する社会 三五(55)頁―四〇(60)頁

結論 四〇(60)頁―四四(64)頁

参考文献

Zum Verständnis meiner Arbeit 四四(64)頁―四八(68)頁  
四九(69)頁―五〇(70)頁

『パンとぶどう酒』冒頭の都市像(高橋)

序論

われわれにとって古典語をすらすら読んだり、流暢に話したりすることは必ずしも必要でない。私は、古典というものは、本質的に解読されるべきものであると考える。さっと読んで、ああ分かったといえるようなものは古典の本質ではない。何回も繰り返し読んで、上から読み、下から読み、後から読み、較べて読み、単独に読み、皆と一緒に読み、ひとりで読み、このようにして次第に開示されてくる意味こそは、古典の含む本質的意味である。

(山田晶：中世哲学研究、第一、X頁)

Johann Christian Friedrich HÖLDERLIN: ヘルダーリン(一七七〇年―一八四三年)の手になる二行連句詩型(Exerzizien: <sup>エクスライゼン</sup>Blagie)の雄篇『パンとぶどう酒(Brod und Wein)』(一八〇〇年―一八〇一年)は、西欧精神史の難問を内に感し、盛られた内容を読み解くに容易ならぬ抒情的思想詩(Gedankenlyrik)なのであるが、冒頭の始まりは一見するところ極めて日常的な表象に満ちており、在来の研究では取り立てて問題にされることはなかった。例えば、第二次世界大戦後の『パンとぶどう酒』に関する代表的な研究である Jochen

SCHMIDT (シュミット) の「ヘルダーリンのエレギー」 「パンとぶどう酒」 (Hölderins Elegie „Brod und Wein“) (一九六八年) では、全百六〇句からなる思想詩全体に百五十頁程に亙る註釈を施しているが、冒頭の六句全体については僅か一頁程 (三四頁―三五頁) の分量の註解をあてているに留まっている。なるほど思想豊かで難解な「パンとぶどう酒」の内容から考えて、思想詩冒頭の然りげ無い日常性が意味を持つとは考え難かったであろう。ところが、何気なく当たり前に思われるこの歌い出しの諸表象に注意を傾け、思想詩に盛り込まれた内容との関連に思いを凝らしてみると、解説されるべき様々な問題が既にこの冒頭に素朴な形で提示されているのに私は気付いた。思想詩・第一句では、一つの世界空間として都市の夕暮の情緒が内面への探求に至る門戸を開放する。ここで既に思想探求に相応しい内面空間 (Innenraum) として、市壁に取り囲まれた市街が選ばれているのである。

この都市像を究明するにあたって本論では、当時すなわち江戸時代後期の西欧の歴史的現実を考慮しながら、思想詩の映像や調べの喚起する世界を裏付けてゆきたいと考えている。しかしながらこの際、ヘルダーリンに関する伝記的研究 (例えば、Wilhelm MICHEL: シットヘル「フリードリヒ・ヘルダーリン伝」 (Das Leben Friedrich Hölderins) 一九四〇年) は意外に頼りにならない。なぜなら、ここでは大抵詩人個人の人生行路や当時の政治状況が問題となるのであって、残念ながら当時の日常生活の具体的な様子とか、その経済的基礎づけにはあまり配慮が払われていないからである。そこで本論としては経済史や農史などの歴史研究の成果を踏まえ、「パンとぶどう酒」冒頭の詩想が土台としている西歴一八〇〇年頃のドイツにおける都市と農村のあり方、またそれらの各領邦における差異を顧慮するとともに、他の先進諸国に比べ産業革命の立ちおくれた当時のドイツ社会における生産様式の発展段階をも留意したいと考えている。例えば、夜間照明の問題

(思想詩・第一句―第二句) にしても、門閥の社交広間の華美な裝飾用釣燭台に輝く蜜蠟燭は、一般市民の手の届く代物ではなく、市民生活の街路や屋内を点す光は獣脂蠟燭や油燈のささやかな燈火であったと考えられる。

このような歴史探求が詩想から遊離して空回りしないために、本論としてはできる限り思想詩の叙述に即して史的問題を扱ってゆきたい。本論の始まりに都市の外延を扱うのは、脇道に逸れるためではなく、この迂回を通して当時の西欧都市のあり方を正確に規定するためにほかならない。都市経済の支配する流動的な今日の市民社会とは異なり、当時ドイツは農村依存型の固定化した社会であり、この基礎の上に既存の封建的特権が息づいており、裝飾用釣燭台の輝く華麗な宮庭風オペラ文化が咲き誇っていたのである。「パンとぶどう酒」第三句の「歩いて帰宅する人々 (... gehn heim ... die Menschen)」との対比で、私は第二句の「松明を飾して (大路を) 疾駆する馬車が過ぎ去る (mit Pakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg)」に、歌劇場や社交の夜会へと急ぐ門閥の姿を考え、これを「過ぎ去る (hinweg)」と歌った詩人の姿勢に注目した。つまり、私は既存の「オペラ文化 (Kultur der Oper)」 (ニーチュ「悲劇の誕生」参照) を否定して、新たに來たるべき祝祭空間へと向けられた詩人の眼差をここに読み取ったのである。この関連で思想詩・中央部の「至福なるギリシア」 (第五五句) における「天上の祝祭」 (第一〇八句) が、「偉大なる運命 (モイラ) の轟く (tönet das grobe Geschick)」 (第六二句) 古典ギリシア祝祭悲劇の時空として立ちあらわれる。すなわち、蒼穹の清澄な大気アイテルの下、白昼に野外で催された古典ギリシア祝祭悲劇の誕生する開かれた空間が、裝飾用釣燭台の輝く西欧の歌劇場や社交広間の閉ざされた屋内と好対象をなすのである。この関連で興味深いのが、ヘルダーリンが讃歌「ライン河 (Der Rhein)」 (一八〇一年) の第十節―第十一節や頌歌

「ルソー」(一八〇〇年)などで、英雄のごとき時代の予言者として称えた Jean-Jacques ROUSSEAU: ルソー(一七一一—一七七八年)の『演劇論 (Sur les spectacles)』であらう。つまり、ここでルソーが、共和国(具体的にはギリシアの都市国家ポリスとかルソーの祖国である西欧都市ジュネーブ)の祝祭の全人民的性格と宮庭風オペラ文化の排他的(exclusif)な性格とを見事に分析し、オペラ文化を眺み合わせて、祝祭空間の開けへと雄飛せんとしているからである。

同時代の資料として私は、ヘルダーリンの畏友 Georg Wilhelm Friedrich HEGEL: ヘーゲル(一七七〇—一八三一年)の政治論文『ヴェルテムベルクの最近の内情について』(一七九八年)の分析を参考にして、思想詩・第一句に登場する領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトの民会(Landschaft)における都市貴族の越権と宮庭との癒着を考えに入れ、ヘルダーリンがこのような門閥に纏わる華美な裝飾用釣燭台や松明の光を「過ぎ去る」ものとして描き(第二句)、それに対して、慎ましきと優しきに包まれてほのかに点る燈火(Erleuchtung)の街路(第一句)を都市像の象徴として心をこめて表現しているのに注目した。

次に本論が主に問題とする『パンとぶどう酒』第一節の全詩節十八句を、シュトゥットガルト版ヘルダーリン全集の第二巻(九〇頁)より引用してここに掲げておこう。

※以下、ヘルダーリンの作品からの引用は、特に断らない限り、この歴史的批判版により巻数と頁数のみを示す。

- 一 Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,
- 二 Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.
- 三 Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,
- 四 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
- 五 Wohlzufrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
- 六 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

七 Aber das Saitenspiel tönt fern aus Garten; vielleicht, daß  
八 Dort ein Liebendes spielt oder ein einsamer Mann  
九 Ferner Freunde gedenkt und der Jugendzeit; und die Brunnen  
十 Immerwillend und frisch rauschen an duftendem Beel.  
十一 Still in dämrriger Luft ertönen geläutete Glocken.  
十二 Und der Stunden gedank ruft ein Wachter die Zahl.  
十三 Jetzt auch kommet ein Wehn und regt die Gipfel des Hains auf,  
十四 Sieh! und das Schattenbild unserer Erde, der Mond  
十五 Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht  
kommt,

十六 Voll mit Sternen und wohl wenig bekümmert um uns,  
十七 Glänzt die Fremdlingin unter den Menschen

十八 Über Gebirgshöhn traurig und prächtig herauf.

町は静かにやすらうてゐる。ひっそりと街路に灯はとまり、  
松明をかざして馬車はときに音立てて過ぎぬ。

五 昼の喜びに満ち足りて人々は家路につき、  
抜かりのない商人はわが家にくつろいでその日の  
損益を思いはかる。忙しかった広場には  
いまは葡萄も花も手芸の品々もない。

十 だが、遠くの園からは絃のひびきがきこえてくる。おそろくは  
恋するもののすさびであろうか、それとも孤独な者が  
遠い友らを、また若い日を、偲んでいるのだろうか。噴泉は  
絶えまなくほとばしって、匂やかな花壇を濡らしている。

静かに暮れすすむ空にはいま打ち鳴らす鐘がひびき、  
夜警は時の数を告げて過ぎてゆく。

ふと風が起こつて林苑の梢をうごかす。  
見よ、われらの大地の影像、月もいま  
ひそやかに立ち昇る。思念に酔う夜が  
満天の星をちりばめてやってきたのだ。われらのいとなみにはかかわ  
りなく

この驚嘆すべきものは、人間の世に異郷の客としてかがやき出る、  
山々の背から、悲愁をおびて壯麗に。

(手塚富雄訳、和訳全集、第二巻、一〇九頁)

本 論

〔一〕 市街の外延

(1) 都市と農村

思想詩『パンとぶどう酒』冒頭では、「町は静かにやすらっている (Rings um ruhet die Stadt)」と語られてゐる。ここで町とは市街であり、これは市壁 (Stadtmauer) によって取り囲まれた内部領域である。この市街が都市 (Stadt) の原形なのである。ところが、ドイツでも十九世紀以降の産業革命の進展にもなれ、都市本来の領域である市街部は旧市街 (Altstadt) として歴史的遺物となつてしまつた。すなわち、旧市街の外延にも市街が拡がり、かつては田園地帯であつた所が新市街 (Neustadt) として都市の一部になつたからである。この結果、昔日のような都市と農村 (Land 或いは Dorf) との判然とした区別はなくなつてしまつた。ところが、本論の扱う一八〇〇年頃のドイツでは、都市が農村の田野の只中に輝いていたのである。その様をヘルダーリン自身が詩歌『閑暇 (Die Muße)』(一七九八年) の第二〇句以下で次のように描いてゐる。

- 一〇' Und nun führt mich der Pfad zurück ins Leben der Menschen,
- 一一' Fernher dämmert die Stadt, wie eine eiserne Rüstung
- 一二' Gegen die Macht des Gewittergotts und der Menschen geschmiedet,
- 一三' Majestätisch herauf, und ringsum ruhen die Dörferchen;
- 一四' Und die Dächer umhüllt, vom Abendlichte geröhlet
- 一五' Freundlich der häußliche Rauch; es ruhn die sorglich umzäunten
- 一六' Gärten, es schlummet der Pflug auf den gesonderten Feldern.

(第一卷、一三六頁)

二〇、 やがて、小径が、わたしを人間の生活のなかへと連れ戻すと、かなたに市街がほのかに浮んで見える堂々たる眺めは、嵐の神や人間の軍勢に拮抗せんと鍛え上げた青銅の甲冑の眺めさながらだ。そして町の周辺には、小村がしずかに憩つてゐる。夕ぐれに光にあかあかと染つた屋根は

二五、 戸毎の炊煙になつかしく包まれ、心をこめて垣むすびした庭も安らい、鋤は、選別された畑でまどろんでゐる。  
(高橋英夫訳、和訳全集、第一巻、二七一頁)

ここでは都市の市街(第二二句)が、それを取り巻く農村地帯(第二三句)から明らかに区別されて、「青銅の甲冑の眺めさながら」「堂々たる」(第二二句、第二三句)姿を呈している。他方、都市の「周囲には、小村がしずかに憩つてゐる」(第二三句)。このような情景を、産業革命を経て資本主義経済の発達した今日のドイツのあちこちで見出すことは困難である。もし類似の情景を探そうとするなら、限られた場所へ足を運ばねばならない。例えば、タウバー (Tauber) 川沿いの田舎に残る中世風の町ローテンブルク (Rothenburg) を訪れるならば、ここに歌われているような世界が今日でもなお意図的に歴史遺産として保存されているのを確かめることができるであらう。

農村がのどかに憩う様は詩歌『閑暇』においてしんみりと歌われている。この安らう世界に向けられた眼差は、農家の仕事で重要な役割を果す「Pflug」(第二六句)へと落ちる。和訳はこれを「鋤」と訳しているが、正確に言うところには「犁」である。鋤 (Spaten) はシャベル (Schaufel) に似た道具で、手の力でもって土を掘り起こす。これとは異なり、犁 (Pflug) は漢字そのものが示しているように、牛や馬などの家畜に牽かせて大地を耕す農具である。

五九 Lieblich tönt die gehämmerte Sens und die Stimme des

Landmanns,

六〇 Der am Pfluge dem Stier lenkend die Schritte gebent,  
(第一卷、二〇七頁)

快く響きわたる穀物を刈る大鎌の音と農夫の声、  
農夫は犁のうしろから雄牛を操り歩みを命ずる。

ヘルダーリン自身が詩歌『さすらい人 (Der Wanderer)』の初稿(一七九七年)でこのように描写しているのに注目しておこう。

この犁の改良に関しては、土木事業に秀でた古代ローマ人も北方のゲルマン人に遅れを取ったようである。ローマで未だ無輪犁 (aratum: Haken) しか使用されていなかった西歴紀元前後に、当時ラエティア (Raetia) と言われたティロル (Tirol) 地方付近で有輪犁 (currus: Karrenpflug) であるゲルマン犁 (Germanischer Pflug) が発明されたのである。ゲルマン犁は二輪車を有し、普通二頭の連畜によって牽かれ、役畜を操る者、梶棒により反転を操作する者(以上の二者は大抵少年)、それに進行方向を決める農夫の三名が耕耘作業に携わる農耕の主役であった。マンハイム (Mannheim) の書誌学研究所 (Bibliographisches Institut) 編『大ドゥーデン (Der Große Duden)』第三巻『図解辞典 (Bildwörterbuch)』(一九五八年)の二三三頁で、この有輪犁の図解を目にすることができる。必要は発明の母で、雑草が多く、湿気が高く、地質の重いゲルマニア (Germania) の硬質な土壌がこのゲルマン犁を生み出したと言えよう。上掲ドゥーデンの『図解辞典』の二二七頁にある農耕姿の挿絵に見られる無輪犁もなお併用されていたことは確かであるが、それと同時に有輪のゲルマン犁をも忘れることはできないであろう。実際、既出の詩歌『さすらい人』における「農夫の声」(第五九句)が、ゲルマン犁による農耕を想像させはしないだろうか。

## (2) 農業の世紀

思想詩成立に先立つ時期は西欧で通例「啓蒙 (Aufklärung) の世紀 (le siècle des lumières)」と命名されている。これに対し、農史家 Wilhelm ABEL (アーベル) は大著『中世初期から十九世紀に至るドイツの農業史 (Geschichte der deutschen Landwirtschaft vom frühen Mittelalter bis zum 19. Jahrhundert)』(一九六二年)の要約とも言える『ドイツの農業発達史の三段階 (Die drei Epochen der deutschen Agrargeschichte)』(一九六二年)において、啓蒙期の記録から『Ökonomisches Jahrhundert』という表現を引用し、同著第二章、第五節の冒頭において、十八世紀後半を「農業の世紀」として位置づけている。

「経済」Ökonomie とは、この時代の用語法では、すぐれて農業を意味する。そして、農業はこの世紀をもっとも強く特徴づけた。当時、農業は、すでに同時代人の注目を集めるほど急速にかつ一般的に上流社会の関心のまことにさなっていた。ヴォルテール (Voltaire 本名: François Marie Arouet, 一六九四—一七七八) は、オペラ見物のあと穀物のことをあれこれ語り合う「上流婦人達」について嘲笑した。マリー・アントワネット (Marie Antoinette, 一七五五—九三) は、馬鈴薯の花を身に飾ったり、編み物袋を穀類の種子の入れ物に試みたりした。オーストリアのヨーゼフ二世 (Joseph II, 一七四一—九〇) は、犁のうしろに立って肖像を描かせたり、イギリスのジョージ三世 (George III, 一七三八—一八二〇) は、「百姓ジョージ」として賛美されている。プロイセンのフリードリヒ大王 (Friedrich II (der Grosse), 一七二二—八六) に由来し、しばしば引用される言葉に次のものがある。「農業は、あらゆる技術のうち第一のものであり、それなしでは商人も、詩人も、哲学者も存在しない。大地が産み出すもののみが真の富である。」

(中村勝／三橋時雄共訳、一一七頁—一八頁)

『経済表 (Tableau économique)』(一七五八年—一七六八年)の作成で名高き François QUESNAY: ケネー (一六九四年—

一七七四年)に代表される重農主義者 (economiste) (エノニスト) (Dictionnaire QUILLET. Paris. 一七七七年、第一九九六頁)の活躍するこの時代を経て、一躍主食の位置へと踊り出たのが、ここでも話題となっている馬鈴薯 (Kartoffel) である。十七世紀には貴族の美食にすぎず、一七〇〇年頃にはほとんど知られていなかったにもかかわらず、馬鈴薯はドイツにおいて一七七〇年代に農村の飢饉を救い既に不可欠の常食となり今日にまで至っているのである (Die Kartoffel sigete doch . . . "Bayer" Pflanzenschutz-Kurier. 一九六四年)。

農業の世紀 (Ökonomisches Jahrhundert) ではなく都市が農村に依存した経済構造を示す。すなわち、人々の大多数が農業に従事し、生産物の大部分は農産物であり、例えば穀物が租税として貨幣の代りに物納された。それのみではない。この農業経済の世紀には、犁刀 (Pflugmesser) など農具の改良がすすみ、農法の改善もおこなわれ、特に一八〇〇年頃には農業生産者に相当の余力が見られるようになったのである。

ヘルダーリンの描く農村風景には、農家の自給自足的な性格が色濃く見られる。既出の詩歌「閑暇」のほかにも、例えば別の詩歌「夕べに思う (Abendphantasie)」(一七九九年)の冒頭では、

- I' Vor seiner Hütte ruhig im Schatten sitzt  
II' Der Pflüger, dem Genügssamen raucht sein Heerd.  
III' Gasfrendlich tönt dem Wanderer im  
IV' Friedlichen Dorfe die Abendglocke.  
(第一巻、三〇二頁)

おのが小屋の門かどへの木蔭に やすらかに農夫は憩い  
足るを知るその人のかまどの煙は立つ。  
やさしく旅人を迎えて平和な  
村には夕べの鐘がひびく。

(手塚富雄訳、和訳全集、第一巻、三三六頁)

と歌われている。このような余裕を支えるこの時代の農業生産力の発展の要として、ここでは旧来の封建制度下での典型的農法である三圃制度 (Dreifelderwirtschaft: assolement triennal) からの脱皮を考慮することにしよう。

三圃制度は、西欧封建時代が始まる八世紀・九世紀から、市民社会勃興の十八世紀・十九世紀に至る約一〇〇〇年の期間にわたって存続した支配的農法であった。すなわち、この三圃制農法の恒常化が、一千年にわたる西欧封建制度の安定と呼応していたと言えよう。それゆえに、この農法に変革が加わる時期が、封建社会から市民社会への過渡期に符合することは偶然のことではない。歴史的に見ると、三圃制度自体は、二圃制度 (Zweifelderwirtschaft: assolement biennal) から発展した合理的な農法なのであるが、ここではこの発展の問題については論述を省略する。三圃制度とは文字通り「三」を基本単位としている。農地は大きく三分され、夏作 (Sommerung) のためにその三分の一が、第二の三分の一が冬作 (Winterung) のためにあてられ、残りの三分の一は休閑地 (Brachfeld) として放牧のための牧草地となる。この三等分された各々でまたこの三様の循環を繰り返す。例えば、冬作の場合は、秋に犁で耕した後に越冬作物 (Wintergetreide) の種まきが行なわれる。これは冬を越して翌年の夏に収穫される。その後ここは刈株牧草地 (Stoppelweide) となり、放牧の結果、家畜の糞尿で自然と肥料を施される。これを踏まえて、一冬を越してから春に犁で耕し、その耕地に夏作物 (Sommergetreide) の種が播かれる。この作物はひき続く同年の夏に取り入れが行なわれるのである。この後の耕地は、まず仮草草地 (Dreesch) として翌年の六月まで放牧に供され、使徒ヨハネの日 (Johannistag: 六月二十四日) 頃に犁で耕されたあと、本来の休閑地として秋の越冬作物の種播きまで牧場となる。これは、冬期が長く、年に一度しか収穫できない寒冷な北欧の自然に適った農法で、畜糞による堆

肥 (Viehmist) やえも必須とせず、湿原に繁茂する雑草を家畜の食用に供するのみならず、その糞尿を自然の肥料として活用する巧みな制度であると言えよう。ところが、これは画一的生産様式であって、あらゆる土地で同じ循環方式がとられる。農民は概ね共同の規制に従って働き、耕作強制 (Erlzwang) を各人の意志で拒むこともできず、三圃制度が存続する限り、農業を個人個人の主体的意欲的企画でもって発展させることは困難であったのである。

『パンとぶどう酒』の詩想が土台としている西歴一八〇〇年頃に、この三圃制度に改良が加えられる。ここで注目したいのは、耕地に植える作物についてである。すでに、夏作物 (Sommergetreide) とか冬作物 (Wintergetreide) という言葉に表われているように、農作物と言えば、穀物 (Getreide) であつた。例えば、夏作物としては燕麥 (Hafer) や大麦 (Gerste) が、冬作物としてはドイツ小麦 (Dinkel) とか小麦 (Weizen) やライ麦 (Roggen) が考えられる。ここに例えば輪作 (Fruchtwechsellwirtschaft) の理論が応用され、前作物が後作物にあたる加重的拡張生産能力を活用すると、休耕地を次第に耕地として利用してゆく道が開けることになる。そこで畝作野菜 (Hackfrucht) である馬鈴薯 (じゃがいも) とか、簇葉植物 (Blattfrucht) の三葉 (Klee) の栽培が導入され、これによって穀物類の連作が減り、耕地の痩せが少なくなるとともに、家畜用の飼料 (特に三葉) が確保できて家畜が増え、更には、増えた家畜の糞尿を堆肥として積極的に施肥に利用してゆくことができる。こうして旧来の三圃制農法では、三分の一の耕地が常に休耕地であつたのに対し、十八世紀末にはこれが一割を割るようになり、十九世紀には次第に休耕地が消滅すると同時に、当時の技術的先進国イギリス伝来のノーフォーク輪作制 (Norfolk Rotation) のような多圃輪作制が一般化していったのである。

思想詩『パンとぶどう酒』に目を向けてみると、間接的にはあるが、

第五句に三圃制度のゆらぎを見て取ることができるのではなからうか。

五  
六  
... steht von Trauben und Blumen,  
... der geschäftige Markt.

... 葡萄とか花の  
... 忙しい広場の市場

すなわち、十八世紀末において、この「葡萄」とか「花」は、「これまでの三圃式農業が、都市向けの商業作物や葡萄栽培などによってすでにあるていど崩されていた」(渡辺寛・ドイツ農業の展開過程、一四一頁) ことを顧慮させるからである。

## (二) 都 市

### (1) 市壁の内側

市壁の外側を取り囲む平穏な農村の性格が悠然たる大地に根ざしているのに対し、その内部の市街の性格は都市建設の礎となる石材によって規定されている。

三九 Ihr großen Städte  
四〇 Steiern aufgebaut  
四一 In der Ebene! (Dichtungen und Briefe. 七十七頁)

汝等、大いなる都市  
石材にて平原に築き上げられた都市よー

このように Georg FRANKL: トラークル (一八八七年—一九一四

年)が詩歌「夕べの国西欧(Abendland)」第四稿(第三九句—第四一)句)で、西欧都市建設の性格を的確にとらえている。西欧都市の周囲には耕地が広がり、所々に木立ちが影を落とし、四面これと言って遮るものなく、彼方には森が見えることもあれば、遠くに山並みが続いていることもある。ここには万物を育くむ大地がしかと腰を下ろし、大地の自然に根ざした生活が土台となる。このように農村が都市の外延に久遠の彼方へと広がる大地に根ざしているのに対し、都市は有限な市壁に取り巻かれて、その内側に集積している。「周囲が高い市壁で囲まれている町のなかでは、遠くの山に沈む夕陽の影で時を計ることもできず、町のなかには檜の大木も影を投げかけることはない」(阿部謹也「中世の窓から」二五頁)。このように、「いわゆる『自然』をとりこむことができなかった」(同書、一四頁)都市の内部には、逆に至るところに人為の証が認められる。市内の川は堀割のなかを流れ、敷き詰められた石畳の道路の両側には、数階建ての石造建築が立ち並ぶ。市中でひとときわ聳え立つのが、教会の尖塔や官庁の物見の塔である。農家があちこちに散在するのに対し、都市内の館や家屋は、隣同士の間隙もなく、びっしりと詰って立ち並んでいる。狭い街路では、両に列なる家並みに遮られて、昼間さえ日が射さない死角もある。ヘルダーリンが自由韻律の讃歌「パトモス(Patmos)」(一八〇一年—一八〇二年)第三十一句以下で、地中海に面した小アジアの都市について、

- III' Mir Asia auf, und geblendet sucht'  
 IIII' Ich eines, das ich kenne, denn ungewohnt  
 IIIII' War ich der breiten Gassen, ...

(第二卷、一六六頁)

私に小アジアが立ちあらわれた。私は眼も眩んで探した。  
 何か知っているものはないものかと。なぜなら、このように  
 広い街路を私は見慣れていなかったからだ。

と語っていることから、西欧の街路(Gasse)の狭さが伺い知られよう。このように、都市では佇において、農村のような伸びやかさは見られない。この石材で築かれた市街には、むしろ自他がせめぎあって拮抗する一種の緊張関係が生まれていると言えよう。

このような西欧都市の緊密(innig: intime)な性格と、農村のおおらかな性質が両者を規定する。悠然たる大地に育まれて穏やかで和やかな風土に農村が憩うのに対し、市街の石畳や石造建築に映える月影や街路の燈火には、何かしら張り詰めたものが宿る。この石材の西欧都市の性格を、静かに心をこめて表現しているのが、「パンとぶどう酒」第一句中央の中間休止(;)の間を置いて発せられる清音の摩擦閉塞音〔t〕であろう。

Rings um ruhet die Stadt; still wird die erleuchtete Gasse,

この〔t〕が頭韻をなして「Stadt」へと呼応して、「Stadt; still」と反響し合い、ひっそりとした都市の内面空間(Innenraum)の音色が読者の内耳に印象深く残る。ところで、この親密(innig: intime)な世界が街路(Gasse)であって大路(Strasse)ではない点に注意したい。蓋し Michael HAMBURGER: ハンバーガーの英訳(二四三頁)ではこれが「street」と訳されている。残念ながらこれは意を尽くしていない感を免れないであろう。

## (2) 城塞都市

既に引用(一)(1)したヘルダーリンの詩歌「閑暇」の第二十一句以下が歌っている都市(Stadt)の姿に注目してみよう。

II' Fernher dämmert die Stadt, wie eine eiserne Rüstung



111' Gegen die Macht des Gewittergotts und der Menschen  
geschmiedet.  
1111' Majestätisch herauf, ...

かなたに市街がほのかに浮んで見える堂々たる眺めは、  
嵐の神や人間の軍勢に拮抗せんと鍛え上げた青銅の甲冑の  
眺めまながらだ。

ここでは都市が城塞 (Burg: bourg) として扱えられている。今日の  
都市の名前、例えばローテンブルク (Rothenburg) とかストラスプー  
ル (Strasbourg) には、この城塞の残影が残っている。ヘルダーリン  
の歌った都市の姿は、文字通り「堂々たる眺め」を呈している。この威  
容は、『君主論 (II Principe)』(一五二三年) 第十章において、  
Niccolo MACHIAVELLI: マキアヴェリ (一四六九年—一五  
二七年) が称えている中世ドイツの帝国自由都市 (Freie Reichs-  
stadt) を想わせるところである。

アラマーニヤ (ドイツ) の諸都市はきわめて自由なうえに、市外の属領も少な  
い。これらの都市は、自分たちのつこうを考へて皇帝に服することはあつても、  
皇帝や他の近隣の有力君主などすくも恐れてはいない。その理由は、これら  
の諸都市は堅固な城塞で固められていて、だれの目にも、そこを占拠するのは  
やっかいな骨の折れることにちがいないとわかるからである。すなわち、これ  
らの都市にはすべて、必要な堀や城壁がめぐらしてあり、大砲も不足なくそな  
えられている。 (池田廉訳、八六頁)

このようなドイツ諸都市の理解に対しては、既出 (一) (2) のプロイ  
セン王フリードリヒが、一七四〇年にオランダのハーグ (Haag) で出  
版されたヴォルテール編『反マキアヴェリ論』或いはマキアヴェリの君  
主論に関する批評の読み (Antimachiavel ou Essai de critique sur  
le Prince de Machiavel)』で反駁を述べている。

ドイツ帝国都市の意義に関してマキアヴェリの描いた像は今日では全くあては  
まらない。大砲の一撃で、ないしは要求さえすれば、皇帝はそのような都市を  
支配できるであろう。どの都市も城塞としては劣悪で、あちこちにすしりとし  
た塔が古い市壁に申し掛けているし、それを囲む堀は大部分崩れ落ちた土壇  
で埋まってしまっている。

(独訳『Der Antimachiavel』第四三頁より重訳)

このフリードリヒの言葉は仏大革命 (一七八九年勃発) の風雲児  
Bonaparte, NAPOLEON: ナポレオン (一七六九年—一八二一年)  
の率いるフランス共和国国民軍によって十全に証明された。例えば、エ  
ルザス (Elsas) の古都シュトラースブルク (Strasbourg) などラ  
イン河西岸はフランス共和国に併合 (一七九五年のバゼル: Basel  
和約により) され、やがてドイツ全土は帝国都市をも含めナポレオン  
の支配下に置かれ、西歴九六二年来の「ドイツ国民の神聖ローマ帝国  
(Das Heilige Römische Reich Deutscher Nation)」も、皇  
帝ナポレオン (一八〇四年即位) の側臣で、一八〇六年には解体し、事  
実上帝国自由都市も有名無実となるのである。

確かに、軍事力に対して都市はもはや抵抗する力をほとんど持ってい  
なかつたと言えよう。しかし、農業の世紀においてもなお都市は独自の  
権利を、すなわち都市特権 (Stadtrecht) を保有しており、例えば、  
交易の権利を握っていたのである。つまり、開市権 (Marktrecht) に  
根ざして市街の広場に立つ市 (Markt) がその代表的存在であった。思  
想詩『パンとぶどう酒』第六句には、この市場が日昼の躍動を伝えて、  
夕闇に憩っている様が描かれている。

五 ... leer steht von Trauben und Blumen.

六 Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

... 忙しかった広場には

いまは葡萄も花も手芸の品々もなご。

広場に市の立つのは、今日のドイツの都市でも見受けることができる。恐らくそのような印象から、「市場には、野菜、果物のほかに手あみの籠とか箆とかが並ぶ」(南原実註、第二三〇頁)と解釈されたのである。上掲の和訳も同様な理解に基いていると考えられる。ところが、西歴一八〇〇年頃のドイツ商工業の発展段階を考えると、この解釈には疑念が残る。すなわち、今日に比べると当時は、手仕事(Handwerk)の占める割合が遙かに高かったと思われるからである。イギリスで十八世紀におこった産業革命の立ち遅れたドイツにおいては尚のことである。ドイツでは工場制手工業(Manufaktur)の段階にさえ生産様式は十分発展を遂げていなかったのである。自動機械による大量生産の一般化した今日では、手工業は特殊な工芸品(Kunsthandwerk)に限られるのであるが、主に同業組合(Zunft: corporation)の統制下での職人(Handwerker: artisan)によつて製品が生み出された当時においては、『Werke der Hand』(「パンとぶどう酒」第六句)が、「手芸の品々」(和訳)にとどまらず、中広い手仕事の品々を含んでいたと考えることができるであろう。これをハンバーガーの英訳(二四三頁)は『hand-made goods』と直訳してゐるだけであるが、Giorgio VIGOLO: ヴィネーロは「手仕事の品々と諸仕事(mestieri e lavori)と伊訳(Nuova Universale Einaudi. 第三三卷 一〇一頁)に「仏訳者 Gustave ROUD: ルーは「幾多の手の仕事(labeur de mille mains)」と説明的に訳(Bibliothèque de la Pléiade. 八〇八頁)し、当時の手仕事の多様性を物語らせてゐる。なるほど都市は、もはや戦争のための軍事的城塞ではなくなつてゐた。しかしそれはなお、ギルド(同業組合)体制(Zunftwesen)の経済的城塞であつたと言えよう。今日では、農民であれ、漁民であれ、靴屋を始めるのは、個人の決断と能力の問題であつて、この際に当時のようなギルドの抑圧(Zunftzwang)を受けることはないであらう。ところが、今日あたりま

えに思われている営業の自由(Gewerbefreiheit)が、当時においては自明のことではなかつた。ドイツでは概ね十九世紀の前半をかけて徐々に、このギルド(Zunft)の城塞が崩れてゆき、ようやく十九世紀半ば過ぎに営業の自由が事実上認められるようになるのである。

このギルド体制の骨子をなすのが徒弟制度(Meister-Lehring-Verhältnis)である。職人はまず丁稚(Bursche)・徒弟(Lehrling)から雇用職人(Geselle)をへて親方(Meister)となる。まず第一の関門が、修業証書(Lehrbrief)を獲得することである。このために見習期間(Lehrjahre)を勤めあげなければならない。この証書により始めて雇用職人となることができる。雇用職人はこの修業証書を携え、この証書に記載された助言を将来の行為の範として、実習期間(Wanderjahre)に諸国遍歴をして見聞を広め、腕を磨き上げて、親方を目指すのである。Richard WAGNER: ヴァーグナー(一八二三年—一八八三年)の案劇「ニルンベルクのマイスター歌人(Die Meistersinger von Nürnberg)」(一八六八年初演)には、親方連(Meisterschaft)がいかに堅牢で尊厳ある組織であるかが示されてゐる。とりわけドイツの諸都市は、中世以来この親方連を中核とする徒弟制度によつて強く性格づけられてゐる。例えば文学作品の傑作として、Wolfgang GOETHE: ゲーテ(一七四九年—一八三二年)作「ウィルヘルム・マイスターの修業時代(Wilhelm Meisters Lehrjahre)」(一七九六年)や「ウィルヘルム・マイスターの囃歴時代(Wilhelm Meisters Wanderjahre)」(一八二九年)とか、NOVALIS: ノヴァーリス(一七九七年—一八〇一年)著「ザイスの学徒(Die Lehrlinge zu Sais)」(一七九八年)と云つた表現を有した作品が見い出せるのもドイツならではのことであらう。思想詩「パンとぶどう酒」冒頭に表現されている都市像の背景にも、このような社会構造が控えており、諸々の表象と微妙にかかわりあつてゐると思われる。例えば、思想詩第三句の「家路へと帰る

人々(…: gehn heim …: die Menschen)』と同じく、ここでの関連では「雇用職人」を考へることができぬであらう。

### (3) 首都シュトゥットガルト

ここでヘルダーリンの伝記をひも解いてみよう。この詩人の生地は南西ドイツの領邦国家(Territorialstaat)の一つであるヴュルテムベルク(Württemberg)である。当時ドイツは、今日の西独・ドイツ連邦共和国(Bundesrepublik Deutschland)や東独・ドイツ民主共和国(Deutsche Demokratische Republik)のように、まごまごした統一国家ではなかった。「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」(九六二年—一八〇六年)は有名無実の国家形態であり、当時十八世紀末においてはまさに崩壊寸前であった。

Das liebe heilige Römische Reich,  
Wie hält's nur noch zusammen?

(ハンブルク版、第三巻、六八頁)

われらの神聖ローマ帝国が、  
どうして崩壊せずに居られようか?

これはシュトラーヌブルク大学法学部卒で領邦小国家ヴァイマル(Weimar)の政治家となったゲーテの一八〇〇年頃における現状分析(『ファウスト(Faust)』第一部、一八〇八年、第二〇九〇句—第二〇九二句)である。このように事実上、ドイツ(Deutschland)という統一国家が有名無実であったのであるから、この時代においては祖国(Vaterland: patrie)ドイツということが、未だ自明のことではなく、それはむしろ統一の理念であり課題なのであった。

諸領邦およびその領邦国会の利害が、ドイツに統一国家権力が存立するにかか

ていることが、洞察の上で自明であればあるだけ一層、いざ行動するとなると諸領邦自身には、このドイツに対する関心がますます疎遠なものとなってしまっている。——ドイツに対する? このドイツという国がなお誰にかかわりを持つのか? この国に対する祖国愛(Patriotismus)がどこから生まれて来ようか?

とヘルダーリンのチュービンゲン神学院(Tübinger Stift)での同室の親友ヘーゲルは『ドイツ憲法論(Die Verfassung Deutschlands)』(一八〇〇年—一八〇二年)でこのように事態の困難さを述懐している(Werke、第一巻、五七七頁)。

当時のドイツの政治状況を歴史学では小邦分立(Kleinstaterei: particularisme)という用語で説明している。帝国議会(Reichstag)も帝国最高裁判所(Reichskammergericht)も、この分立を拘束する力を持ち得ず、分立割拠では世俗の支配者のみならず、聖職諸侯(Geistlicher Fürst)も領地を治め、帝国土は細分化されて、小邦の数は二百五十程にもほり、これに帝国自由都市が五十程各地に散在していた。小邦群の中でも、ヴュルテムベルクは比較的広汎な領域を有していて、その広さは一万平方キロメートルに及び、岐阜県や秋田県に近い面積を有していた。人口は六十万程で、今日と比べると僅かな数なのであるが、当時としてはこれでも人口密度が高く、シュンヘン(München)を首都としていたバイエルン(Bayern)の二倍程、ベルリン(Berlin)を首都としていたプロイセン(Preußen)の二倍半程の人口密度を示していたのである。

※当時の国土と人口の統計に関して本論では、当時のドイツの著作家 H. A. O. REICHARD: ライヒェルトの旅行案内書『ドイツ旅行中の旅客(Der Passagier auf der Reise in Deutschland)』(一八〇三年)の記述と S. W. H. BRUFORD: 『リッフェンフォードが十八世紀のドイツ(Germany in the eighteenth century)』(三三三頁—三三六頁)で要約整理したものを参考とした。

領邦国家ヴュルテムベルクの首都が、詩人の学友ヘーゲルの生誕の地シュトゥットガルト (Stuttgart) である。当時、首都とは領邦領主 (Territorialfürst) の宮殿の所在地 (Residenzstadt) を意味した。

ここで敢て何故この領邦首都シュトゥットガルトに眼を凝らすのかと云うと、実は西歴一八〇〇年夏六月から翌一八〇一年冬一月にかけての約半年間、ヘルダーリンがこのシュトゥットガルトに居を構えており、この滞在が思想詩「パンとぶどう酒」(一八〇〇年—一八〇一年) 冒頭の都市像成立の背景となっていると考えられるからである。

思想詩の第二句から、冒頭で歌われている都市 (die Stadt) が、小都会でないことが容易に察せられる。

Und, mit Fabeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

松明を飾して (大路を) 馬車は疾駆して過ぎ去る。

この詩句では、松明 (Fakeln) のみならず、馬車 (Wagen) も複数名詞である点に注意したい。幾台もの馬車が騒然と行き交うに足る余裕ある空間は、当時においては帝国都市なみの大都会でないと考え難いであろう。シュトゥットガルトはそれに比肩し得た領邦都市 (Landstadt) であった。思想詩の第一句で市街の小路 (Gasse) が示されたのに対し、この第二句では都会の大路 (Strasse) が念頭に置かれている。ここではまず、この領邦都市シュトゥットガルトに注目してみることにしよう。

ヴュルテムベルクの人口密度については既に述べたように、プロイセンやバイエルンより遥かに高かったのであるが、それぞれの領邦の首都の人口を比べてみると、プロイセンの首都ベルリンが、当時のドイツ最大の帝国都市ハムブルク (Hamburg) 並みの大都会で、人口十五万人に達せんとしており、バイエルンの首都ミュンヘンが名だたる帝国都市

ケルン (Köln) やフランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main) と比肩でき五万程の人口を擁していたのに対し、ヴュルテムベルクの首都シュトゥットガルトは二万弱の人口しか有していなかったのである。例えば、すでに言及 (一) (1) した今日の田舎町ローテンブルク・オブ・デア・タウバー (Rothenburg ob der Tauber) が当時は帝国都市で人口二万五千を越えていたことを考えると、シュトゥットガルトが今日のように第一級の人口密集地ではなかったことが解る。首都以外の都市で注目されるのは帝国都市であった。当時ヴュルテムベルクでは、ハイルブロン (Heilbronn)、エスリングゲン (Eßlingen)、ロイトリンゲン (Reutlingen) がそれぞれ一万人程の帝国都市であった。当時の群小領邦の一つであったザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ (Sachsen-Weimar-Eisenach) の首都ヴァイマルには八千人も住んでいなかったのだから、これらのヴュルテムベルクの帝国都市が当時としては相当な都会と考えられよう。すなわち、ヴュルテムベルクの首都とは言っても、シュトゥットガルトに専ら人口が集中していたわけではなく、首都圏中心の中央集権化が色濃く無い注目すべき国土の性格がここに確かめられよう。

次に詩人ヘルダーリン自身が首都シュトゥットガルトをどのようにとらえていたのかに注目してみよう。彼は自らを生地ヴュルテムベルクの息子 (Sohn) として、一方、他の領邦ヘッセン (Hessen) からの親友 Siegfried SCHMID: シュミット (一七七四年—一八五九年) を賓客 (Gast) として、この領邦都市に呼びかけている。

- 七五 Denn mit heiligem Laub umkränzt erhebet die Stadt schon  
 七六 Die gepriesene, dort leuchtend ihr priesterlich Haupt.  
 七七 Herrlich steht sie und hält den Rebenstab und die Tanne  
 七八 Hoch in die seeligen purpurnen Wolken empor.  
 七九 Sei uns hold! dem Gast und dem Sohn, o Fürstin der

八〇、 Glückliches Stuttgart, nimm freundlich den Fremdling mir  
Heimath!  
auf!

(第二卷、八八頁)

七五、

それは聖なる樹々の繁みをいただいてあの誉れ高い都市が  
すでにかなたに輝きながら 威にみちた頭をもたげたからだ。

凛々しい姿、葡萄樹の支えと縦とを

高く至福の紅の雲のなかにそばだてている。

われらにやさしい笑みをみせてくれ、この賓客とそしてこの息子に。

ふるさとの女王よ、

八〇、 多幸なシュトゥットガルトよ、この他郷の客をやさしく迎えてくれ。

(手塚富雄訳、和歌全集、第二卷、一〇六頁)

これは『パンとぶどう酒』に先立って創作された詩歌『シュトゥットガルト』(一八〇〇年)の第五節の一部(第七五句―第八〇句)である。詩人はここで、都市の外延の丘陵地帯と市街の姿に着目している。丘陵は森林地帯のままに残れば、*O Tannenbaum, o Tannenbaum*…と歌に唄われた樅(第七七句)の茂みとなり、さもなければ葡萄畑(*Weinberg*)として利用され、葡萄(*Reben*)が杭棒(*Stab*)の支え(第七七句)に絡みつく。シュトゥットガルトは今日の県庁所在地(*Landeshauptstadt*)としては珍らしく葡萄畑の多い都市で、平坦な耕地は居住地となつてしまつたが、丘陵地帯には今尚ここで歌われているような緑がそこに残っている。正確に言うならば、田園地帯が住宅地となつた今日なればこそ、この緑が一層映えている印象を受けるのである。この自然の緑と都市の共存は、とかく都市と言つと抱きやすい反自然的な性格(二二(1)参照)を補うものであり、都市を歌つてもなお自然らしさを失わないヘルダーリン文学の特質が、このような地方都市(*Landstadt*)の性格に呼応している点をここでは留意しておくことにしよう。

## (二) 市民

### (1) 市民生活

十八世紀啓蒙期が農業の世紀(*Ökonomisches Jahrhundert*)であつたことは既に(一)(2)述べた。ここでは、この世紀におけるそのような農業主体の経済構造が、政治的にはどのようなことを意味したのかを考えてみたい。これに関しては、古典経済学の巨匠 *Karl Marx*: マルクス(一八一八年―一八八三年)の親友 *Friedrich Engels*: エンゲルス(一八二〇年―一八九五年)が三月革命(一八四八年)の勃発寸前に、政治論文『ドイツの現状(*Der Status quo in Deutschland*)』(一八四七年)において見事な分析を示している(*Marx\ Engels: Werke*, 第四卷、四二頁―四四頁)。

ドイツの現状は次のようになっている。

フランスやイギリスでは、ブルジョアジーは貴族を倒して国家のなかの支配階級の地位にのぼるほど強力となつているが、ドイツのブルジョアジーはこれまでまだそれだけの力を持つたことがない。なるほど彼らは、諸邦の政府にたいしてある影響力をもっているが、この影響力は、利害の衝突が起る場合には、いつでも土地所有貴族の利益にゆずらないわけにはゆかない。フランスやイギリスでは都市が農村を支配しているが、ドイツでは農村が都市を、農業が商工業を支配している。これは、ドイツの絶対君主諸国でそうであるばかりではなく、立憲君主諸国でも同じであり、オーストリアやプロイセンだけではなく、ザクセン、ヴェルテムベルク、バーデンでも同じである。

こういうふうになつてゐる原因は、西方諸国にくらべてドイツの文明段階がおかれてゐることにある。西方諸国では商工業が、わが国では農業が、国民大衆の決定的な生業である。イギリスは、農作物を全然輸出しておらず、たえず外国から輸入しなければならぬし、フランスは、すくなくとも輸出するだけのものを輸入している。そして、この両国は、その富の基礎をなによりもまず

工業製品の輸出においている。ところが、ドイツは、工業生産物はほとんど輸出しておらず、大量の穀物、羊毛、家畜などを輸出している。ドイツの政治制度が確立されたとき——すなわち一八一五年（ウィーン会議によるドイツ連邦成立）には、農業の優位はいまよりもまだまだ大きかった。そのうえ、その当時には、ドイツのうちでもほとんど農業ばかりをいとなむ部分が、まさに最も熱心にフランス帝国の打倒に参加したという事情のために、農業のこの優位はいっそう大きくなっていた。

ヨーロッパの大部分の国でそうであるが、ドイツでも農業の政治的代表者は貴族、大土地所有者の階級である。貴族の独占的な支配にふさわしい政治制度は封建制度である。封建制度は、どこでも、農業が国の決定的な生産部門でなくなるにつれて、また、農業をいとなむ階級とやらんで工業をいとなむ階級が、農村とやらんで都市が、生まれてくるのにつれて、それと同じ度合で崩壊したのである。

（村田陽一訳、和歌全集、第四巻、四一頁—四二頁）

本論で問題としているヴェルテムベルクについても、エンゲルスは言及を怠っていない。エンゲルスの語る「農業の優位（Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus）」が、本論の扱う仏大革命（一七八九年勃発）の時代には一層甚しかったことは容易に推論できようであろう。ドイツ有数の工業地帯ルール地方（Ruhgebiet）の綿紡績工場主であったブルジョアジー（Bourgeoisie）の息子エンゲルスには、「ドイツが工業生産物をほとんど輸出しておらず、大量の穀物、羊毛、家畜などを輸出している（Deutschland . . . exportiert wenig Industrieprodukte, aber große Massen von Korn, Wolle, Vieh usw.）」ことが、単なる統計上の数値には留まらなかった筈である。

エンゲルスの分析は鋭く、農業と封建制度の癒着を指摘し、都市と工業の力が市民階級（ブルジョアジー）の擡頭を可能にし、これが「貴族を倒して国家のなかの支配階級の地位にのぼる（den Adel zu stürzen und sich zur herrschenden Klasse im Staat emporzuschwingen）」歴史過程を問題としている。エンゲルスがここで貴族と考えているのは、

主に宮延に纏わる封建制度下の政治軍事的支配階級のことである。思想詩「パンとぶどう酒」の第二句が、この階級の夕暮の姿をとらえて次のように表現している。

Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

松明を飾して（大路を）馬車は疾駆して過ぎ去る。

この「松明を飾した馬車」を、「夕暮、客をのせてホテルへといそぐ馬車である。」（南原美註、第二一九頁）と考える解釈がある。私はこの解釈を支持できないが、これを間違いと断言し切るつもりはない。しかし、「松明をかざして（mit Fakeln geschmückt）」を「ランプをつけた馬車を詩的にこう表現した」（同註、同頁）と解釈する必要は必ずしもないであろう。例えば、当時のドイツの著作家 Andreas Georg Friedrich REBMANN: ノープマン（一七六八年—一八二四年）の「ドイツの一部の縦断遠征旅行（Wanderungen und Kreuzzüge durch einen Teil Deutschlands）」（一七九五年）よりブリュフォードが引用した次の箇所注目してみよう（一〇二頁）。

貴族の馬車が街路を疾駆して走り、歩行者が四六時中生命の危険にさらされていても、市民はなんにも感じない。そして借金で首がまわらないある伯爵の従僕が、門の所にいた人々のために馬車をとめなければならぬというので、「ここは、ぼりした人々の間に燃えている松明をふりかざして割り込む」と、それが当たった人は衣服にたい熱いピッチを拭いたり、もの静かに帰って行く。貴族と軍隊の両特権階級に属さぬ者は、当地ではだれもがもっぱら我慢しているらしい。（上西川原章訳、九八頁）

確かに当時は馬車でも次第に角燈（Laternen）を使い始めたが、しかし尚このように松明も使用されていたと考えられる。

ところで、ここで注目したいのは、むしろ華美な松明の炎である。例

えば思想詩では「松明」を飾して馬車が疾駆する(大路)」「第二句)が「ひっそりと燈火がとる街路」(第一句)に對峙する。この点、第一句(... Stadt; still...)の頭韻「It」(既出(二))「It」のひっそりと心に入る情緒と好對照をなし、第二句では類似的頭韻「I」が「飾して、疾駆する(... geschmückt, rauschen...)」華麗な出で立ちを印象づける。

... Stadt; still wird die erleuchtete Gasse.

Und, mit Fakeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.

他方、このような華美な印象からは遠い「こざっぱりした人々」は「もの静かに帰って行く」のである。この人々は、貴族のように華麗な夜会に疾駆しない市民(Bürger: citoyens)である。ヘルダーリンは「パンとぶどう酒」のひき続く第三句で、このような「もの静かに帰って行く」人々に焦点をあて、温かく見守る視線でこれらの人々を次のようにとらえている。

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen.

昼の喜びに別れを告げて、満ち足りて人々は、憩いを求め家路へと歩む。

これらの人々は、詩句の文字通り「歩いて(gehn)」家路につく。歩みは「ひっそりと燈火がとる街路(Gasse)」へとちかかると。これに對して、貴族たちは舞踏会(Ball)やまたは歌劇場(Oper)へ、或いは演劇場(Theater)へと馬車に乗って「大路(Strabe)」を疾駆する。詩人はこの姿を「過ぎ去る(hinweg)」ものとして次のように第二句末尾で歌っている。

..... rauschen die Wagen hinweg.

— C C — C C —

……驕然と馬車は過ぎ去る。

語義のみならず、五詩脚詩句(ペンタメトロン)の後部の律動の流れ(— C C — C C —)そのものが、この過ぎ去ることを見事に表現している。殊に頭韻「w」が「馬車が過ぎ去る(... die Wagen hinweg)」のを強く印象づける。この際しかし、詩人の意識は、疾駆する馬車の過ぎ去るのを察知するのみであり、疾駆の果に起こることに関心を示しているように思われず、ルーの仏訳にあるように、情景は「遠ざかり消え去る(... s'éloigne et meurt)」(第八〇八頁)。すなわち、高価な(precieux)富に飾られた社交人趣味(preciosité)が、ここでは沈遠なる熟慮の深みで黙殺されていると考えられよう。

私に誰かが聞くでしょう。私の眼前にある宮殿を私が美しいと看做すかと。ならば、私はちなみにこう答えるだろう。ホカンと口をあけて見落れるだけのこう言った類のものに私は愛着を抱かないと。或いは、パリで小料理屋が一番気にいったと言っイロクオイ族の酋長のように答えるかも知れない。いやそれだけではない。人民が汗水垂らして働いた成果を、そのような無くも済むものに浪費する門閥の虚栄心を私は正にルノー流に(auf gut Rousseausch)罵倒することができる。ついに私はやすやすと次のような確信を抱くことができる。私が或る無人島に置かれ、もはや人と再会する希望を断られたとして、よしんば私が望むだけで、今述べたような華美な宮殿を魔力により即座に出現させることができるとしても、私はそのような労をとることさえしないだろう。もし私に居心地よい小屋が一軒あるならば。

(Akademie-Textausgabe, 第五卷, 二〇四頁—二〇五頁)

このように哲学者 Immanuel KANT: カント(一七二四年—一八〇四年)は美学論文『判断力批判(Kritik der Urteilskraft)』(一七九〇年)において、既成の封建貴族文化の美意識・価値意識を真向から粉砕している。この空へと放下した先覚者をヘルダーリンは一七九九年付弟宛の書簡において、「だらけたエジプトから、思弁の自由で孤独な砂

漠へと国民を率き、神聖な山上から威力ある律法 (das energische Gesetz) を下すドイツ人のモーゼ (der Moses unserer Nation) (第一七二書簡、第六卷、三〇四頁) として称えている。ヘルダーリンの視線もこの先覚者同様に華美・栄華から逸れて、和やかにつろぎ (Wohlfrieden) へと向かう。

- 三' Satz gehn heim von Freunden des Tags zu ruhen die Menschen,
- 四' Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt
- 五' Wohlfrieden zu Haus; leer steht von Trauben und Blumen,
- 六' Und von Werken der Hand ruht der geschäftige Markt.

昼の喜びに別れを告げて、満ち足りて人々は、憩いを求め家路へと歩

- 五、  
和やかに家にくつろいでいる。葡萄も花もなく、  
手仕事の品々もなく、今では昼間に忙しかった広場の市場も憩っている。

第三句では歩いて (gehen) 帰宅する市民が、第四句から第五句にかけては家庭にくつろぐ家長が、温かく見守る詩人の視線でとらえられている。ここには文字通り「和やかにつろぐ (Wohlfrieden) 」「様心が心をこめて表現されている。とりわけ、詩人の故郷シュヴァーベン (Schwaben) 地方 (ヴェルテムベルク一帯) で好まれる表現 (beliebter Ausdruck) と言われる (シュミット: ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」三四頁) ヴォール・ツォー・フリーデン (古典詩の韻律を顧慮して私は「——と読み、——と読む」と言うドイツ詩に有りがちな律動には従わない) の音価が、正にここで二度も繰り返される主題「平安 (... ruhet ... .. ruhen ... .. ruht ...)」(第一句、第三句、第六句) の律動を悠然と響き渡らせている。

次に、これらの詩句に関する解釈や翻訳等の問題点を検討しよう。序

言で示した「ヘルダーリン全集」からの和訳との相違は四ヶ所ある。その一つについては既に論述(二)(2)した「手芸の品々」と「手仕事の品々」についての問題である。以下あらかじめ問題点を示すと、次の内容となる。

- 一' 《Werken der Hand》(第六句) に つろぐ。
- 二' 第三句の前置詞《von》に つろぐ。
- 三' 第三句冒頭の副詞《Satt》に つろぐ。
- 四' 第四句の形容詞《sinnig》に つろぐ。
- 五' 第四句末の主語名詞《Haupt》に つろぐ。
- 六' ヴァックヴィッツ「一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究」(一九八二年)の解釈に対する批判検討。

順序に従って第二点である第三句の前置詞《von》に関して論述することから始めよう。これについて通常は、序論で引用した和訳「昼の喜びに満ち足りて」のように《von》が《satt》にかけて解釈される。例えば、ルーの仏訳 (Rassasiés des plaisirs du jour: 八〇八頁) でも、ヴィゴロの伊訳 (Sazi delle gioie del giorno: 一〇一頁) でも、ハンバーガーの英訳 (replete with the day and its pleasures: 二四三頁) でも同様の観点で翻訳されている。これらに対して、南原実註(二二九頁)では、「von は satt にかけてなうで ruhen にかけて読む」と説明されている。すなわち、「昼の喜びに満ち足りて」とは訳さないで解釈されているのである。

一応、私はこの解釈に同意して上掲の和訳を試みたのであるが、しながら他方、このように文法上の厳密さを追求することが、必ずしも詩句を適切に読み取らないのではないかと云う危惧が私には残った。即ち、詩文に於ては、多義性、或いは両義性が、反って表現の広がりや豊かさを喚起するのではないかと考えたからである。これは例えば、杜甫



(七十二年―七七〇年)の五言律詩「春望」領聯の対句において、主語を作者と取る解、「花」と「鳥」と取る解、ともに両立すると考えるのに似ている。

感時花濺淚  
恨別鳥驚心

「花が涙を濺ぎ」、「鳥が心を驚かす」と同時に、「花にも涙を濺ぎ」、「鳥にも心を驚かす」別の主体を読みこむことが可能だからである。このような両義性の容認の観点から、思想詩「パンとぶどう酒」第三句《von》を前後の両方へと連関させて文法上の厳密さを留保し、両義的な表現の自由を私は支持したい。

※「春望」(七五七年)の領聯に關し、吉川幸次郎「杜甫詩注」第四卷(筑摩書房。一九八〇年)では、「主としてリズムの問題から」、作者を主格とする読解に、「不安を感じ、賛成しない」(一九六頁)とし、「かく涙を濺ぐのは花であり、心を驚かすのは鳥である」として、吉川はこの聯を読みたい。」(岩波新書「新唐詩選」一九六五年改版、二〇頁)旨を主張すると同時に、主語の問題に關する兩論それぞれの典拠をも詳述してある。

第三の問題点は、第三句冒頭の副詞《Satt》に關する。この訳語を私は便宜上「満ち足りて」と示したが、しかし残念ながら、意を尽くしていない感を免れ難い。なぜなら、ここでは単純な満喫が表出されているのではなく、揺れ動く波の襲にも似た微妙な転調のしらべを含み《Satt》と語られているからである。転調とは冒頭の第一句から第二句にかけて流れ下りゆく静寂への引潮(例えば、既出の第二句末「……騒然と馬車は過ぎ去る。」)に対し、生育する市民生活の悠然とした満潮なす第五句冒頭における全音の響き「ヴォール・ツー・フリーデ

ン」が転調の推移を特徴づける。当該の副詞《Satt》は、この移りゆく調への告知として、割り切れぬ多義性を孕んで、忽然と現れる。

- 一' ..... rauschen die Wagen hinweg.
- 三' Satt gehn heim .....  
— — — — —
- 四' Und Gewinn und Verlust .....  
— — — — —
- 五' Wohlzufrieden zu Haus: .....  
— — — — —

この副詞《Satt》は、「ヴォール・ツー・フリーデン(和やかにくつろいで)」(第五句)へと至る波動の冒頭で忽然と語られたに留まり、未だ《Satt》が「満ち足りて」語られているわけではない。この副詞の割り切れなさは、ひき続く第四句で波立ち、「収支得失(Gewinn und Verlust)」と詩句が流れる。この際、重心は実に後方の《Verlust》に懸っている。第四句冒頭が韻律上むしろ、スポンディオス(—)かダクテュロス(—CC)を望みながらも、物足りないトロカイオス(—C: Und Ge-)の響きに終っているのに対し、ひき続く詩句は、ダクテュロス(—CC)の十全な調べを獲得し、中間休止(=)へと詩句が重く押し掛かり、「フエア・ルスト(Verlust)」と落ち着く。この深沈せる響きは、単に現世活動における損失のみならず、現存における存在の樂園喪失(Paradies-Verlust)の感情にまで遡反するに足る調べをも蔵していると考えられる。その余情を踏まえて今度は満潮「ヴォール・ツー・フリーデン」が、第五句冒頭で高潮をなす。《Satt》は、この高潮を告げる波立ちであり、未だ割り切れぬ動静の中で、ささやかに口籠られるのであって、決して、「満ち足りて」発せられることはないのである。蓋し、この慎ましい動静が、この思想詩冒頭ではむしろ瞳目すべき点なのであって、正にこれが本論の焦眉的たる第一句の「燈火の

光 (Erluchtung)」「(三) (2) 以下で詳述) のひそやかな色調に繋がり、思想詩『パンとぶどう酒』冒頭の都市像の基本性格に協和しているのである。

第四の問題点は、第四句の形容詞《*sinmig*》に関する。ところで、文脈上この語義を考量すると、前後の副詞「満ち足りて (Satt)」(第三句冒頭) と「和やかにくつろいで (Wohlaufrieden)」(第五句の冒頭) に現われた基調が重要となる。この文脈の基調を鑑みて、私は「思慮深い」と云う訳語を択り、この基調と協和し難い和訳「抜かりのない」(「序論」で引用) には従わなかった。ちなみに、これに関して南原実註は、次のような興味深い説明を提示している。

*sinmig* 頭の *メイ*、思慮ノアルくらいの意味 *へ* なかしい *い* などの悪い *ひ* *び* *き* はなく。Gewinn und Verlust も金銭の *もう* け *だけ* ではなく、今日の一日は自分に何をもちたか、自分はこの一日に何を学び、どういう失敗をしたか、ということであって、だからこそ *wohlaufrieden* 心 *ミ* *チ* *タ* *リ* *テ* 今日の日を一日をふりかえられるのである。思慮のない人々、何も考えない人々は、夕食で腹がみちれば豚のように寝床にころがりこんでしまう。

(一一九頁—一三〇頁)

序論に引用した和訳のように「抜かりのない」と訳するのは、以上の観点から「へさかしいい」などの悪い *ひ* *び* *き* が感じられて相応しくないとと思われる。実際この点では、*Vaijuro*、*ル*、*ハンバーガー* ともに、各々の翻訳で、《*sinmig*》を《*gudizioso*》、《*penche*》、《*pensive*》と解釈し「悪い *ひ* *び* *き*」を示していないのである。

第五の問題点は、第四句末の主語名詞の《*Haupt*》をどう解するかである。序論で引用した和訳はこれを「商人」と訳したが、私はここでこれを「家長」と訳してみた。「商人」を誤訳と言うのではない。そうではなくて、この両方の和訳の根拠を探り、それに関する問題点をここで明確にしてみたいと思うのである。既に (二) (3) 述べたように、へ

ルダリーンの伝記から、ここで歌われている都市が領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトを背景として、この都市でヘルダリーンの居を構えていた、親友 Christian LANDAUER: ランダウエル (一七六九年—一八四五年) の商館が浮かび上って来る。思想詩第四句の「思慮深い家長 (*ein sinniges Haupt*)」の歴史的背景には、このシュトゥットガルトの毛織物商人ランダウエルの姿が控えていると考えられる。従って、「商人」という和訳は、この史的事実の裏付けからも説明として正鵠を得ていると言えよう。

実際に文脈に即して、この訳語「商人」と「家長」を考えてみよう。この際《*Haupt*》で「商人」を考える場合には、この言葉が、その前にある表現「収支を慮る (*Gewinn und Verlust wäget*)」(第四句) に関連づくことにならう。なぜなら、「商人」の関心は「この「収支」だからである。すると、第四句は句末で、むしろ休止を望むことになる。ところが詩句は、第四句末の名詞《*Haupt*》において停止する句頭点(・)が無く、それに引き続く第五句に直ちに繋ぎ行かように読める。

四 Und Gewinn und Verlust wäget ein sinniges Haupt

— 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 —

五 Wohlaufrieden zu Haus: ……

— 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 — 〇 —

第四句の五歩格 (ペンタメトロン) の後半が、中間休止 (||) の後にとる律動は、休止を置かず第五句へと流れてゆくと考えられる。この流れにおいて、《*Haupt*》と《*Haus*》とが頭韻 (H) をなして協和する。第四句での「収支 (*Gewinn und Verlust*)」への関心は、動詞「慮る (*wäget*)」と形容詞「思慮深い (*sinniges*)」とに拠り十分に受け止められ、続く《*Haupt*》は、「和やかに家へくつろいで (*Wohlaufrieden zu Haus*)」(第五句) と、ひとまとまりになるように読める。ところで、

只今問題にした形容詞「思慮深い (sinniges)」が、「商人の慮る収支」に限定されず、更により深い省察へと誘ふ。ここにおいて語義は、「外」に留まらず「内」へも拡がり、この豊かに広がりゆく人間の動靜が、人間存在の安んぎと憩いの場である「家 (Haus)」へと落ち着くのである。この脈絡から、《Haupt》は「商人」よりも、むしろ「家長」として理解されるのが望ましいであらう。

第六の問題点は、Stephan WACKWITZ (ヴァックヴィッツ) の論文『一八〇〇年頃の悲哀と理想——ヘルダーリンの悲歌作品研究 (Trauer und Utopie um 1800. Studien zu Hölderlins Blegenwerk.)』(一九八二年) の論述に関連してゐる。まず、ヴァックヴィッツの所見を紹介しよう。彼は、詩人の祖国ヴェルテムベルクで所謂「シュヴァーベン共和国 (Die Schwäbische Republik)」擁立の運動が封建体制側の巻き返しにより破綻をきたした時代に相応しい形式として悲歌を考え、この脈絡で「パンとぶどう酒」をも考察する。この際、思想詩の冒頭を読み解くにあたって、史的唯物論哲学の巨匠マルクスの圧巻『資本論 (Das Kapital)』(一八六七年、第一巻) とその理論的基礎となる思索の手稿『経済学・哲学草稿 (Ökonomisch-philosophische Manuskripte)』(一八四四年) が分析の拠り所とされる。すなわち、『資本論』第一篇・第一章「商品」の分析論における、商品の二重形態 (Doppelform) 、「つまり自然形態 (Naturform) と価値形態 (Wertform) の問題 (Werke, 第二三巻、六二二頁) を鑑みて、思想詩冒頭の「市場 (Markt)」(第六句) に注目し、そこでの「花 (Blumen)」(第五句) を商品として、他方、第十句の花壇 (Beet) に咲く花を「自然の脈絡にある花 (Blumen in ihrem natürlichen Kontext)」(ヴァックヴィッツ、二八頁) としてとらえ、この両者を対立させている。ちなみに、思想詩の第十句へは第九句から次のように流れる。

九

..... und die Brunnen  
Immerquillend und frisch rauschen an duftendem Beet.

絶えず湧き出し、水しぶきをあげて進み、芳香を放つ花壇を濡している。

滔々たる自然の生の躍動をこの詩句から汲みとるかわりに、ヴァックヴィッツはここに、庭園の牧歌 (Idyll des Gartens) を読み取り、思想詩冒頭 (六句) の都市の情景にあるような「実生活からは失なわれた統一を、思想を媒体として回復する (restituiert ... die Einheit, die der Praxis verlorengegang, im Medium des Gedankens.)」場と考える (二九頁)。この統一 (Einheit) への志向に対して、「冒頭の憂愁 (Melancholie) を彼は次のように説明する。

この詩節の異常な効果の本質的契機である憂愁が私には、市民社会の法則下にある諸対象のそのような二重の形態や現象に、すなわち社会化現象における根本的経験 (eine zentrale Erfahrung in der Sozialisation) に還元されるように思われる。(二八頁)

この「根本的経験」の裏付けとしてヴァックヴィッツが下敷きとしている (二九頁) のは、マルクス『経済学・哲学草稿』の第一手稿における「疎外された労働 (Die entfremdete Arbeit)」の章にある次の命題である。

Mit der Verwertung der Sachenwelt nimmt die Entwertung der Menschenwelt in direktem Verhältnis zu.  
(Werke, 補巻、第一部、五一二頁)

事象世界の価値増大に直接比例して、人間世界の価値下落が加速する。

このようにヴァックヴィッツは、思想詩冒頭をマルクスの疎外 (Entfremdung) の概念を活用して解釈しようとしたのであり、この疎外ゆえの人間存在の「離反体験 (Trennungserfahrungen)」(一九頁) がヴァックヴィッツの論究の眼目である。この視点から、第四句の「収支を慮る思慮深い家長 (ein sinniges Haupt)」が彼には搾取階級ブルジョア (bourgeois) と考えられ、その和やかに家にくつろいでいる (Wohlfrieden zu Haus) 根拠づけは、「市場での営業が儲かったからである (denn die Praxis des Markts hat sich gelohnt)」(三〇頁) と説明されるのである。

果して、このような疎外理論を思想詩にあてはめることができるのか吟味してみよう。第六句の「忙しかった市場 (der geschäftige Markt)」から考えられることは、この日が祝祭日ではなくて、週日を意味している点である。この週日の人々の夕暮の姿をとらえてヘルダーリンは、

Satt gehn heim von Freuden des Tags zu ruhen die Menschen,

昼の喜びに別れを告げて、満ち足りて人々は、憩いを求め家路へと歩む。

と表現している。この「人々」として恐らく労働者 (Arbeiter: *ouvrier*) も考えられよう。蓋し、この労働者は既に (二) (2) 述べたように、当時では尚まだ職人 (Handwerker: *artisan*)、つまり雇用職人 (Geselle) であった。すなわち、マルクスが「疎外された労働」の分析の際に土台とした、工場制手工業から展開する資本主義分業形態は未だ尚これからの展望の中にあつたと考えられる。少くとも思想詩では、「昼間の喜び (Freuden des Tags)」(第三句) が語られている。既に述べたように、この背景が週日なのであるから、この「喜び」は労働の集いやそれにとまらぬ歌声や活気と推測されよう。労働形態が未だな

お、工場制手工業 (Manufaktur) 段階に達していなかった当時の産業技術後進国ドイツにおいて、この推測は十分許容されるであろう。この際、注意しておきたいのは、マルクスの分析対象が十九世紀中葉の産業技術的先進国 (フランスやイギリス…本章 (三) (1) の冒頭に引用したエンゲルス『ドイツの現状』一八四七年、参照) であった点である。エンゲルスの分析にあるように、十九世紀中葉においてもなお「農業の優位 (Die überwiegende Bedeutung des Ackerbaus)」が力説された封建社会ドイツにおいては、資本主義体制の発展がすでに、例えばイギリスに一世紀程もおかれていたのであるから、マルクスの疎外論をヴァックヴィッツのように直ちに『パンとぶどう酒』(一八〇〇年—一八〇一年) 冒頭に適用するのはいささか困難であろう。

残念ながら私にはヴァックヴィッツが、詩句の揺れとが響きに留意して思想詩冒頭を詩節の流れに即して読みとろうとしているように思われない。むしろ、主役を演じているのは、詩の躍動とは無関係な論理の枠であり、しかも、この枠は一定の主義主張を公式化し教条化して得られる固定観念の鋳型であろう。マルクスの著作に限らず、思索書を読むことは正にこの逆、すなわち既成の固定観念 (dogma: *Meinung*) を解体し、生きた新たな連関へと概念を帰納することではなからうか。この点、ヘルダーリンの読みのみならず、マルクスの圧巻の読みにおいても、ヴァックヴィッツが成功しているとは私には思われないのである。すなわち、マルクスは十九世紀の西欧資本主義体制がアングロ・サクソンを先頭にして帝国主義 (例えば、一八四〇年—一八四二年の阿片戦争) へと拡張する時期に鋭くその社会体制の矛盾を衝いた政治経済学の鬼才であった。これに対し、思想詩の成立背景は「農業の世紀 (Ökonomisches Jahrhundert)」(二) (2) 参照) であり、マルクスの批判の対象となった流動する都市経済は未だドイツにおいては発展を遂げておらず、依然と農村依存型の固定化した封建制度が根づいていたと考えられる。

この意味からも、資本主義体制の経済分析を思想詩に直ちにあらわすはめうとしても困難が生ずるのである。

以上、解釈と翻訳に関する問題をまとめてみた。再び本筋にもどろう。時は光の世紀 (siècle des Lumières) と言われる啓蒙時代である。当時のロココ (Barock) 様式やロココ (Rokoko) 様式で華麗に内装された夜間の社交広間 (Salon) の装飾用釣燭台 (Kronleuchter: chandelier) には、教会の祭壇の燭光 (Wachlicht: bougie) に劣らぬ高価な蠟燭 (Kerze: chandelle) の光が輝いていた。今日でも仏国の首都パリ (Paris) 近郊に歴史的遺物として保存されているヴェルサイユ (Versailles) 宮殿の諸々の広間を見学すれば、当時の様子を想像するのに難くはない。当時このフランス宮庭文化の影響下にあったドイツ小邦ヴァイマル宮庭の詩人ゲーテは『西東詩集 (West-östlicher Divan)』(一八一九年) 中の「バルゼ人の書 (Parsi Nameh)」において、高価 (précieux) な装飾用釣燭台の輝く下で肌もあらわな女人 (précieuse) の広間 (サロン) における社交趣味 (préciosité) の雰囲気的確にとらえ、次のように歌っている。

Wo die Flamme brennt, erkennet freudig,  
Hell ist Nacht, und Glieder sind geschmeidig,

(コンヘルツ版、第二巻、一〇六頁)

炎が燃える所で、汝ら喜ばしき知識を得よ、  
夜は明るく、四肢はしなやかである。

この脈絡での燭光に関し Heinrich HEINE: ハイネ (一七九七年—一八五六年) は名著『ロマン派 (Die romantische Schule)』(一八三三年—一八三三年) において、門閥 (große Häuser) に言及して、

市民の獣脂蠟燭ではなく、貴族の蜜蠟蠟燭が主人の食卓に置かれる言 (daß nicht bürgerliche Talglichter statt adliger Wachskerzen

auf die herrschaftliche Tafel gesetzt werden: plutôt que de voir la chandelle bourgeoise remplacer la bougie aristocratique sur la table de leurs seigneurs.)

(Säkularausgabe, 第八巻、二三頁; 第十六巻、二三三頁)

を述べている。市民の照明は獣脂ろうそく (Talgkerze) か油燈であったが、ヘルダーリンが一七九六年十月十三日に弟に宛てた第二二六書簡で語るところに依れば「一台の油燈と油 (eine Lampe und Öl)」(後出) が読書には有効だったようであるから、油燈 (Öllampe) が一般市民の照明と考えられよう。ところが、油 (Öl) と言っても当時は石油 (Erdöl) が未だ採掘されなかった時代である。「世界で最初の石油井戸がアメリカのペンシルベニアではられたのは一八五九年である」(岩波書店版 KAGAKU no ZITEN. 一九六四年 八六〇頁) から、当時の燈油は動植物性のものであったと思われる。「ペンとどろ酒」第一句末尾に歌われている「燈火の点った街路 (die erleuchtete Gasse)」を照明していたのもこの油燈である。これに関して、次に一八五〇年代での発言に注目してみよう。

今やガス燈 (Gasbeleuchtung) の工事が始まって、いかにあの鎖つきの不愉快な油燈 (die fatalen Öllampen mit ihren Ketten) が姿を消すと思ふべし、言ふべくせぬ満足を感じるぞ。

(Gesammelte Werke. 第一巻、二六九頁)

かつての帝国ハンザ (Hansa) 都市リューベック (Lübeck) の都市貴族であった穀物商の末裔で文筆家となった Thomas MANN: マン (一八七五年—一九五五年) は、商会一家の没落を描いた長編小説『ブデンブローック家の人々 (Buddenbrooks)』の第六巻、第七章で、ハンザ都市貴族の一八五〇年代の発言として上記の言説を記している。蜜蠟蠟燭の装飾用釣燭台を室内の広間に輝かせた都市貴族の目には不愉快 (fatal) でしかなかった油燈 (Öllampe) が、しかしながら市民階級の

ヘルダーリン兄弟にとっては貴重な燈火ともちだったのである(既出、第二二六書簡)。

たとえば、一台の油燈と油 (eine Lampe und Öl) を買うだけに必要なお金しか残っていないとしても、また真夜中から鶏の鳴く頃までしか時間が無くとも、おまえは哲学 (Philosophie) を学ばなくては行けない。このことは、どんな折でも兄さんが繰り返し言っていることだ、おまえの考えでもあるのだ。

(第六卷、二一八頁)

すでに(一)(二)指摘したように、十八世紀啓蒙 (Aufklärung) 期は農業の世紀 (Ökonomisches Jahrhundert) であつた。しかし、この産業の生産力の増加とそれに伴なう富の蓄積がすべて生産者である農民層に還元されていたわけではなかつた。既出(三)(1)のエンゲルスの分析に明確に示されているように、この農業生産力の基礎の上に特権階級や宮庭の華美が、例えば唯今言及した蜜蠟蠟燭の裝飾用釣燭台が煌煌と輝き、夜をも昼とせんほどの勢いで燃えていたと考えられよう。ヘルダーリンが思想詩『パンとぶどう酒』で優しい眼差を落とすのは、そのような栄華の輝きではない。

## (2) Erleuchtung

今まで見てきた華美な光輝とは対照的な、ささやかな燈火を語るのが思想詩の第一句後半に位置する形容詞《erleuchtet》である。

... still wird die erleuchtete Gasse,

ひっそりと街路に燈火ともちがともり、

この形容詞を英訳は情緒豊かに *in pale lamplight* (二四三頁) と当時の情景を偲おもはせる意識で示している。すでに述べた油燈 (Öllampe) が光源と考えられるので、今日我々が見慣れている照明とは随分違つても

のであることは確かだ、引用したマンの小説(三)(1)に登場する華美に慣れた豪商が「不愉快な油燈 (die fatalen Öllampen)」と唾棄しているのも不思議ではなからう。この長編小説『ブデンブロック家の人々』からの引用に再び注目してみよう。豪商は、この油燈に対して、近代的な「ガス燈の照明 (Gasbeleuchtung)」を対置させている。まず問題としたのは、《Beleuchtung》と《Erleuchtung》の違いである。思想詩の第一句は《die beleuchtete Gasse》とは語彙なつて、《die erleuchtete Gasse》と歌つてゐるのである。所謂「電飾 (Illumination) の輝かしさ (Beleuchtung) をこゝに読みとめることは困難である。さりげなく街角に点るささやかな光として、ここでは《Erleuchtung》が考えられる。

立ち入つて考えてみるに、この燈火ともちは一体どこに点されているのだろうか。先の長編小説よりの引用を思い返してみると、「油燈は鎖で繋がれている (Öllampen mit ihren Ketten)」とある。街路の両脇の家屋から鎖で油燈を吊していたと想像できる。この様は、今日でもドイツの浪漫的街道 (die romantische Straße) をゆくと、ロマン主義時代の照明様式を歴史的遺産として保存しているタウバー川沿いの田舎町ローテンブルク (Rothenburg ob der Tauber) において、街路の両脇の家屋から吊られた角燈 (Laterne) に、過ぎし日を偲おもはせる燈火が点っている。この燈火が当時のドイツでは相当つつましやかであつたようである。これについては、ブリュフォードが、ロマン主義時代の著作家 W. HOWITT: ハウニット (一七九二年—一八七九年) の著書『ドイツの農村と家庭での生活 (The rural and domestic life of Germany)』(一八四二年) から、次のような興味深い引用を示している。

市街は、月のない闇夜に限られるが、燈火によってどこにかこうにか照らされてゐる。その角燈はフランスでのように、街路にさし渡した綱から吊り下がっている。ここでちらりと瞬くと思つと、遠く離れた所でまたぼつりと別の油

燈がかすかに点る。

(一一二頁)

「街路にさしわたした綱 (a rope across the street)」と言ふ表現を文字通り取れば、マンの語る「鎖 (Kette)」よりも、一層と古めかしい和やかな雰囲気伝わって来る。果たして、思想詩・第一句の《Erlauchung》は、ここに述べられているような街路の角燈だけなのであろうか。これ以外に燈火の点る場所はないのであろうか。これについて興味深い発言は、フランスの歴史家 Jules MICHELET: ミシュレー (一七九八年—一八七四年) が『フランス革命史 (Histoire de la Révolution française)』(一八四七年—一八五三年) において、国会が王の死刑の旨を宣告した一七九三年一月一七日の夜について記している言葉である (第九卷、第十二章)。

長い審議は夜十一時に終った。公共の安全のために、市街全域の照明 (illumination générale) が命ぜられた。これほど不気味なものはない。至る所、窓辺の光 (Lumières aux fenêtres) が、ひび気のない街路を照らした。

(Bibliothèque de la Pléiade. 第二卷、一七六頁)

ミシュレーが、街路の角燈について語るかわりに、窓辺の光 (Lumières aux fenêtres) について語っているのが注目値する。翻って、思想詩・第二句後半の《Erlauchung》を「窓辺の光」と考えてみてはどうであらうか。

再び、ハウイットの『ドイツの農村と家庭での生活』の叙述に注意してみよう。そこでは、「市街は、月のなら闇夜に限られるが、燈火によって、ついにかごにか照らされた (The towns, and that only on dark and moonless nights, are badly lit by lamps)。」とあり、街路の照明と月夜とは共存してはなかったと考えられる。このことを念頭に置いて、思想詩・第一節を読みすすんでみよう。

十四 Stieh und das Schattenbild unserer Erde, der Mond  
十五 Kommet geheim nun auch; die Schwärmerische, die Nacht  
kommt,

十六 Voll mit Sternen ...

見よ、われらの大地の影像 月もいま  
ひそやかに立ち昇る。思念に酔う夜が  
満天の星をちりばめてやってきたのだ。

月 (Mond) のみならず、満天の星をちりばめた夜 (die Nacht ... / Voll mit Sternen) の大自然の明るさは、街路の照明など必要とするであらうか。勿論これは、虚構 (Dichtung) の世界の出来事であるから、読者は当時の歴史的現実を足さひっぱられ、可想界への自由な飛翔を妨げられる謂を持たない。だが、思想詩・第一句後半の《Erlauchung》を「窓辺の光」と解するならば、この光明は、人の住居により近く、心の内を点す燈火として映えてくるのではなからうか。

別の角度から《Erlauchung》について考えてみよう。ルーの仏訳《Illuminée》(八〇八頁) サルゴロの伊訳《Illuminata》(一〇一頁) とともに《Illumination》を語っている。先程『Beleuchtung』との関連で、これを後世の「電飾」に関連づけたが、少くとも独語に入った《Illumination》に関しては、それに相応する華美が十分に感じられる。例えば、Jakob (一七八五年—一八六三年) / Wilhelm GRIMM: グリム (一七八六年—一八五九年) 兄弟の創始になる『ドイツ語辞典 (Deutsches Wörterbuch)』(Leipzig (Hirzel) 一八五四年—一九七一年) における《Illuminieren》の項には、この関連での次の説明が見い出せる。

illuminieren, gebäude oder baumgänge zur nachtzeit mit brennenden lampen festlich ausschmücken. dazu das fern. illumin-nation.  
(一八七七年刊、第四卷、第二分冊、二〇六〇段)

ここでは女性名詞の《Illumination》をも含めて、「建物とか並木道を夜間、燃える油燈で華麗に飾り立てる。」と説明されている。一八〇七年に刊行された Joachim Heinrich CAMPE: カムペ (一七四六年—一八一八年) の『ドイツ語辞典 (Wörterbuch der deutschen Sprache)』(一八〇七年—一八一八年) の第一巻では、この《Illuminieren》の意味を、狭義 (In engerer Bedeutung) の《erleuchten》の意味として、「多くの明かりや油燈で明るくする (イルミネーション)」。家や庭などを照明する。町中は彼の栄誉ゆえに照明された (Die ganze Stadt wurde ihm zu Ehren erleuchtet)。(九八九頁)と説明し、祝祭のような特殊な場合に語義を限定している。とにかく独語の《Illumination》は華美な照明として理解されるのである。

ところが、伊語、仏語の《Illuminatio: illumination》はそうとは限らない。とりわけ、思想詩『ペンとぶどう酒』の成立した仏大革命期を考慮するならば《Illumination》は別様に解し得る。革命の只中、一七九九年に出版された『仏学士院の辞書 (Dictionnaire de l'Académie française)』第五版 (一七九八年—一七九九年) の上巻 (Paris. J. J. Smitz et C<sup>e</sup>書店刊) 七〇七頁には、

Toute la ville étoit illuminée par les feux de joie qu'on avoit allumés dans les rues.

市街全域は街路にともされた喜びの炎により照明されていた。

と云う街路照明のみならず、

Ce Pays là n'avoit pas encore été illuminé par l'Évangile.

その国は福音の (啓示の) 光によって未だ照らされていなかった。

と語った靈魂における《Erleuchtung》についても言及している。例え

は、この聖なる光を人間に求めた所謂「啓蒙主義」を伊語では《Illuminismo》と表現する (Dizionario delle lingue italiana e tedesca. Centro Lessicografico Sansoni 編、Firenze \ Roma \ Wiesbaden (Sansoni \ Brandstetter) 一九七〇年、第一部、六五五頁)。

この関連を考えてみるに、《Erleuchtung: illumination: illuminatio》が、ひとえに燈火の光を英訳 (in pale lamplight) のように具体的に想像するに留まらず、更により広い連関へとかかわることが解る。ちなみに、ヘルダーリンの五歳年下の学友 Friedrich Wilhelm Joseph SCHELLING: シェリング (一七七五年—一八五四年) が親友ヘーゲルに宛てた手紙 (一七九六年一月) には、

ぼくが民主主義者 (Demokrat) だとか、啓蒙主義者 (Aufklärer) だとか、啓明主義者 (Illuminat) だとか、はくことばでそここの人々がかもしたしつゝる嫌疑 (Fragen)

(ヘーゲル: Briefe von und an Hegel. 第一巻、三五頁)

にわたる記述があり、啓蒙主義 (Aufklärung) と並んで、啓明主義 (Illuminismus: illuminismo: illuminisme) が当時の進歩 (保守からみれば危険) 思想の脈絡に並置されている。啓明主義者 (Illuminat) を独語らしく表現すれば当然《Erleuchter》となり一層現実味が増す。このように《Erleuchtung: illumination》が当時では政治的脈絡にまで関連し、「淡い燈火の光」(既出英訳) の甘美な夢想に留まっておれないのである。唯今引用した言葉は更に、シェリングがヘーゲルに宛てた別の手紙 (一七九五年七月二十一日) に見い出せる一連の表現と対比してみるとき明白な意味を見い出せると思われる。

ぼくたちの哲学的去勢者の暴政 (Der Despotismus unserer philosophischen Halbmänner) …… 道徳的暴政 (moralischer Despotismus) …… 政治的暴政 (politischer Despotismus) …… 無知蒙昧 (Ignoranz) …… 迷信



(Aberglaube) として狂信 (Schwärmerei)

(第一卷、二七頁)

既存の封建制度と癒着した体制既成宗教、例えばイエズス会 (Societas Jesu : Jesuitenorden) の反対勢力として啓明結社 (Illuminatenorden) は、アングロ・サクソン系の自由石工結社 (Secta massonica : Freimaurerorden) とともに、代表的な十八世紀の秘密結社であった。この啓明結社は、カトリック信仰の国でイエズス会士の勢力が強かったバイエルンにおいて、「イエズス会の最も尖鋭な論敵」(上智大学編『カトリック大辞典』第二巻、一四九頁、《Illuminaten》の項) と言われる Adam WEISHAUPT : ヴァイスハウプト (一七四八年—一八三〇年) により一七七八年に設立された。フランスの独文学者 Pierre BERTAUX (ベルター) の論文『ヘルダリーンと仏革命 (Hölderlin und die Französische Revolution)』(一九六九年) において、宗教や精神史とのみヘルダリーンをかかわらせることに對する難点が指摘されて以来、研究史はヘルダリーンをこの啓明主義運動にまで関連させるに至っている (Hans GRASSL : グラッスル『ヘルダリーンと啓明主義者たち (Hölderlin und die Illuminaten)』一九七一年)。フランスの別のドイツ研究では哲学者 Jacques HONDT (オント) が、ベルターのヘルダリーン論文に一年先立つ「ヘーゲル論文『知られざるヘーゲル (Hegel secret)』(一九六八年) において、啓明主義運動と仏大革命について次のように明瞭にまとめている (八〇頁—八二頁)。

啓明主義運動はバイエルンでは押し潰され、一七八五年頃組織としては壊滅したが、外国たとえばザクセン——そこではポデーが残り少ない生涯をこの運動に捧げた——あるいはまだヴァイマル、そして恐らくフランクフルトにおいて散発的に存続した。しかし、組織自体の解体後も、啓明主義の精神は最も啓発されたドイツ人、このうえなく大胆な改良主義的ドイツ人を鼓舞し続けたと

言うことができる。

啓明結社員達がその犠牲となった盲目的な過度の抑圧のために、彼らは蒙昧主義と専制に對する闘争の一種のシンボルとなった。しかしフランス革命の勃発によって、世論が彼らの企てに對して懐旧の想いを込めて与えていた意味の再解釈と急進化がもたらされた。

当初、フランス革命はドイツにおいて社会層及びその固有の傾向に依じて、共感あるいは茫然自失の表情で迎えられたが、次第に警戒の念と、革命によって脅かされていると感じる人々の増大する敵意を引き起こすようになる。君主や宮庭から出発したフランス革命に對する抵抗運動は、少しずつ貴族階級全体、ブルジョアジー、そして最初は自由、平等、博愛の標語を熱狂的に受け入れた知識人達にさえ広がってゆく様相を見せる。その時、フランス革命に對する告発と激しいキャンペーンが開始されるであろう。これに異を唱えるのは、大衆から離れた何人かの自由な精神の持主だけであろう。ところでこの反革命的、反フランス的キャンペーンは、反啓明主義運動に接木される。すなわち啓明主義、ジャコバン主義、フランスびいきは一緒くたにされて、同じ弾劾にさらされるであろう。そして反対に、フランスの友、革命的理想的の最後の擁護者達は、とりわけ昔の啓明結社員やその精神的継承者の中から募られるであろう。

(飯塚勝久訳)

ヘルダリーンが、オントの語る「フランスの友、革命的理想的の最後の擁護者」であった点は、ベルターの前掲論文の力説するところである。これに對し、「君主や宮庭から出発したフランス革命に對する抵抗運動」の一環として、文学史上で考えられるのは、「疾風怒濤から初期ロマン派の若き旗手へと受け継がれた彼の進歩的で革命的な醗酵素を何もかも排斥する傾向 (die Tendenz, alle jene fortschrittlichen und revolutionären Fermente zu beseitigen, die von ihrem Sturm und Drang aus an die jungen Vertreter der Frühromantischen Schule weitergegeben wurden)』(Giuliano BAIONI : バイオーニ『古典主義と革命 ゲーテと仏革命 (Classicismo e Rivoluzione. Goethe e la Rivoluzione francese)』第五章よりの抜粋独訳。八三頁)として理解される宮庭詩人ゲーテの所謂「ヴァイマル

古典主義により実現した美学的反動 (von der Weimarer Klassik bewirkte ästhetische Restauration) (同頁)であろう。現代の劇作家 Peter WEISS (ヴァイス) の戯曲『ヘルダーリン (Hölderlin)』(一九七一年) は、ベルターの力説したヘルダーリンの革命精神と、バイオーニが論究したヴァイマル古典主義の保守反動的性格を衝きあわせて、両者の対立点を、固陋な学術研究(アカデシズム)とは違った、大胆で素朴な形で明示している逸品である。ここでは、結局既存の封建的国家体制を擁護したシェリングやヘーゲルを鋭く批判した若きマルクスが、詩人ヘルダーリンに驚嘆し、崇敬の念を抱いて会いに来ると言った架空の邂逅をも巧みに活用して、この詩人の内に秘められた革命精神を浮き彫りにしている。

再び思想詩・第一句に戻ろう。第二句の「松明に飾られ疾駆する馬車 (mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen)」に伺える外面的に華美な光輝との対比で、第一句の《Erluchtung》が親密な (Innigkeit) とともに内面性 (Innerlichkeit) を心にもたらすことが認められる。こう言った言葉の内面性 (Verinnerlichung) は文献の上でも確かめることができる。例えば、グリムの『ドイツ語辞典』における、《erleuchten / Erluchtung》(一八六二年刊第三巻、九〇三段—九〇四段) と《beleuchten / Beleuchtung》(一八五四年刊第一巻、一四四—一四六段) の項を調べてみると、用例として次の対比が目につく。

die Lampe konnte das Zimmer nur spärlich erleuchten. (九〇四段)  
油燈が部屋をかろうじてすこすこ《erleuchten》できた。

die Stadt strahlte von Beleuchtungen. (一四四—一四六段)

市街は、様々な《Beleuchtungen》にのり煌煌と輝いてきた。

この用例では、《erleuchten》のつつましやかな燈火の光に比べて、《beleuchtungen》の光輝が目立っている。

更に、『独語辞典』の引用文献に注目すると、《erleuchten》に関してはキリスト教の『聖書』から数多くの用例があるのに対して、《beleuchten》に関しては、Friedrich SCHILLER: シラー (一七五九年—一八〇五年) やゲーテ、更に JEAN PAUL: ジャン・パウル (一七六三年—一八二五年) からの引用が僅かに見い出せるに留まる。例えば、『新約聖書』のヨハネ福音書に記された次の有名な件をグリムは引用している(九〇四段)。

das war des wahrhaftige Licht, welchs alle menschen erleuchtet. Joh. 1. 9.

この部分は、Eusebius Hieronymus: ヒエロニムス (三四〇年頃—四二〇年頃) の格調の高い羅典語訳に依る西欧カトリック教会公認の標準聖書 (Biblia vulgata) では、典礼 (Missa) などで歌い唱えるために次のように韻文調で訳されている。

erat lux vera.  
quae illuminat omnem hominem  
venientem in hunc mundum.  
(Biblia sacra juxta vulgatae Clementinam. (九八) 頁)

和訳『福音書』(二七五頁) では、この部分を希語原典から、

この方 (言葉) は、この世に生まれて来るすべての人を照らすべきまことの光  
であった。  
(塚本虎二訳)

と訳している。『新約聖書』におけるこの《illuminatio: Erluchtung》を神との関連で一層雄弁に物語ったのはヘルダーリンが「わが魂の人 (der Mann meiner Seele)」(第一〇六書簡、第六巻、一八五頁)

と解した使徒パウロ(紀元十年頃一六五年頃)であらう。グリム「独語辞典」には言及されていないのであるが、西洋キリスト教の礎を築いたこの天才的宗教家パウロの「新約聖書」に集成された数ある手紙の中から、「コリントへ人への第二書簡」をコエロニムス訳で見つみよう(第四章 第六節)。

quoniam Deus, qui dixit de tenebris lucem splendescere, ipse illuxit in cordibus nostris, ad illuminationem scientiae claritatis Dei, in facie Christi Jesu.

(上掲 Biblia juxta vulgatam. (一九二)頁)

宗教改革(一五二七年)の雄 Martin LUTHER: ルター(一四八三年—一五四六年)の名訳に拠る独語版「聖書」では、この箇所がコエロニムス訳に劣らぬ雄渾な文体で流れる。

Denn Gott, der sprach: Licht soll aus der Finsternis hervorleuchten, der ist als heller Schein in unsern Herzen aufgegangen, damit wir erleuchtet werden zur Erkenntnis der göttlichen Herrlichkeit auf dem Angesicht Jesu Christi.

(Die Bibel (一九〇)頁)

即ち、光が闇から輝き出るようにと語られた神が、明るき輝きとして私達の心に立ち現れ、私達は、イエス・キリストを直視して、神の栄光の認識のために照明(Enleuchtung)を蒙るのである。

使徒パウロによりこのように雄弁に物語られた《Illuminatio: Erleuchtung》に関して、一層鍊磨された思想探求をした教父 Aurelius AUGUSTINUS: アウグスティヌス(三五四年—四三〇年)の所謂「照明説(Illuminationstheorie)」をめぐっては看過をなすべからず。特にここでは「私たちの照明(Illuminatio nostra: Unsere Erleuchtung)」への論究を、アウグスティヌスの著作中でも殊に難解

な思索の書『三位一体論(De trinitate)』から引用することとし(第四卷。第二章)。

Illuminatio quippe nostra participatio verbi est, illius scilicet vitae quae lux est hominum. Huic autem participationi prorsus inhabiles et minus idonei eramus propter immunditiam peccatorum; mundandi ergo eramus. Porro iniquorum et superbiorum una mundatio est sanguis iusti et humilitas dei, ut ad contemplandum deum quod natura non sumus per eum mundaremur factum quod natura sumus et quod peccato non sumus. Deus enim natura non sumus; homines natura sumus; iusti peccato non sumus. Deus itaque factus homo iustus intercessit deo pro homine peccatore. Non enim congruit peccator iusto, sed congruit homini homo. Adiungens ergo nobis similitudinem humanitatis suae abstulit dissimilitudinem iniquitatis nostrae, et factus particeps mortalitatis nostrae fecit particeps divinitatis suae.

(Corpus Christianorum. Series Latina. 卷五〇第1763頁—1764頁)

Unsere Erleuchtung ist Teilnahme am Worte, das heißt am Leben, welches das Licht der Menschen ist. Zu dieser Teilnahme aber waren wir ganz unfähig und untauglich wegen der Unreinheit unserer Sündhaftigkeit. Wir mußten daher gereinigt werden. Die einzige Reinigung der Sünder und Stolzen ist das Blut des Gerechten und die Verdemütigung Gottes. Für die Anschauung Gottes, der wir von Natur nicht sind, mußten wir gereinigt werden durch den, der wurde, was wir von Natur sind und was wir wegen der Sünde nicht sind. Gott sind wir nämlich von Natur nicht, Menschen sind wir von Natur, Gerechte sind wir wegen unserer Sünden nicht. Gott würde also ein gerechter Mensch und setzte sich bei Gott für den sündigen Menschen ein. Übereinstimmung besteht nämlich im Menschsein und Menschsein, nicht aber im Gerecht- und Sündigsein. Indem also Christus seine der unseren ähnliche menschliche Natur mit uns verband, hob er die in unserer Ungerechtigkeit liegende

Unähnlichkeit auf. Indem er unserer Sterblichkeit teilhaftig wurde, machte er uns seiner Göttlichkeit teilhaftig.

(Michael SCHMAUS 訳、第十三巻、一四三頁)

私たちの照明とは御言に、言い換えると、人間の光なるあの生命に関与するところである。しかし私たちは罪の不純のために全くこれに与る資格もなく、それに相応しくない。だからこそ、私たちは清められなければならないのであつたのである。不義なもの、高ぶるものを清めるには唯一つ、正しいお方の血と神の謙虚が必要である。私たちが、自分たちと本性を異にする神を観想するためには、本性的に私たちと同じに造られたが、罪の点で私たちと異なる御言によって清められなければならない。私たちは本性的には神ではなく、本性的には人間であり、罪によって正しい者ではないからである。それゆえ、神は正しい人間と成られ、罪人なる人間のために神に執成して下さつたのである。だから、キリストは正しいお方に相応せず、人間が人間に相応するからである。だから、キリストは御自分の人間性の類似を私たちに結び合わせつつ、私たちの不義の不類似を取り去られたのである。また、私たちの可死性を分有されることによって、私たちを御自分の神性に与らせて下さつたのである。

(中沢宣夫訳、一二五頁—一二六頁)

この件が注目<sup>くわんた</sup>に値するのは、単に「照明説」の例示ゆえに留まらないうであらう。それ以上に、ここで興味深いのは恐らく、いさかも説教臭くなく、押しつけがましくない、キリスト者の慎ましい探求の姿であり、ひたむきに問いつづける哲人の強靱な思索の言葉(ロゴス)の力であらう。すなわち、「パンとぶどう酒」に限らず、ヘルダーリンの後期の大作に一脈通ずる精神のこの脈動、つまり、次第に生育する自然の息吹きにも似た魂のこの動静が、数千年を経た歴史的過去のキリスト教父の筆力にも宿り、思想詩冒頭の慎ましく、ささやかな「照明 (Erleuchtung)」と美しく協和しながら、思想詩「パンとぶどう酒」のより本質的な問題である「キリスト論 (doctrina Christiana)」へと一条の光明を投げかけているのが、ここでは印象深いのである。

... es wächst schlafend des Wortes Gewalt (第二巻、九二頁)

... 睡りつつ言葉(ロゴス)の力は生育する。(「パンとぶどう酒」第六八頁)

こつこつ《illumination: Erleuchtung》は、思想詩「パンとぶどう酒」の難問であるキリスト論に辿り着いた。但しこつこつでは、この「照明と啓示 (illuminationes et revelationes)」(Thomas AQUINAS: アクイナス〔一二三五年—一二七四年〕著『神学大全 (Summa theologiae)』〔一二六五年—一二七四年〕第二部・第二巻・第一七二問・第二項、Caramello, Petri 編、Torino [Marietti] 一九五六年刊、七四五頁)について深入りは避け、ヘルダーリンの思想詩・第一句の《die erleuchtete Gasse》に再び思念を戻そう。

... still wird die erleuchtete Gasse,  
... じそりと街路に燈火がともしり

ここではあたかも、パリのルーブル (Louvre) 美術館 (南翼・二階・南壁) 所蔵の George LA TOUR: ラ・トゥール (一五九三年—一六五二年) の燈火を点した名画「マグダラのマリアと油燈 (La Madeleine a la veilleuse)」(一六三五年—一六四〇年) に見い出せるような、慎ましさと優しさが光明を投げかけ、華美からは遠い彼方を射抜き、内面の祈りと沈思への道標となっている。「至福なるギリシア (Seliges Griechenland)」(第五五句、後出〔三〕③) への道程はもはやさほど遠くはない。蓋し、燈火が射抜く彼方は、遠方に広がる大地の彼方の旅先ギリシアではない。この光明はそのような外へではなく、内界へと収斂し、西欧文化の内なる古典ギリシア精神世界へと超出せん

とする。

Noli foras ire, in te ipsum redi. In interiore homine habitat veritas.  
Et si tuam naturam mutabilem inuenieris, transcede e te ipsum.  
(Corpus Christianorum. Series Latina. 第三三卷。一三三四頁)

外へ往くな。汝自身の内へと帰れ。現存の深奥に真理は往まう。そして、もし汝の本性が移ろい往くの見出したら、汝自身をも越えた現存の彼方へと向かえ。

(アウグスティヌス『真の宗教について』(De vera religione) 第三九章、第七二節)

歴代のキリスト教父の雄アウグスティヌスが「真の宗教」について述べたこの言葉は同時に、思想詩『パンとぶどう酒』の道標をなす至言としてここに引用されるのに相応しい名言と看做しえよう。

このような内面への道を射抜く『Erluchtung』について、当時十八世紀の精神史を顧慮すると、ドイツ新教プロテスタントにおける、十七世紀以来の「敬虔主義 (Pietismus)」の流れを考量せざるを得ない。既に引用(三三)(1)した謹厳な哲人カントの市民的道德意識の底流にも、またヘルダーリンが師と仰いで敬愛した同郷シュヴァーベンの風雲児シラーの劇的な詩作品、更には「パンとぶどう酒」の基底にも、この敬虔主義の潮流が認められるであろう。実際、当時のシュヴァーベンの敬虔主義が、それ自体研究に値する意義深い思潮であり、その地で生い育ったシラーやヘルダーリンの精神形成に、これが大いに与かっている点も見落されてはならないだろう。とりわけ本論の扱うヴェルテムベルクのシュトゥットガルトでは、カトリック王国フランス宮庭文化を範とした特権階級の「オペラ文化」(次章(三三)(3))が、慎ましくささやかで厳肅な敬虔 (pietas) の燈火 (Erluchtung) と興味深い好対照をなす。すると、既に(三三)(1)指摘した思想詩冒頭(第一句と第二句)

における謹厳と華美との対比が、更に一つ新たな基礎づけを得るようになるのである。

«ecce pietas est sapientia»  
(「Confessiones」第二〇〇頁)

見よ、敬虔が知恵である。

(アウグスティヌス『告白』第五卷、第五章)

### (3) 祝祭とオペラ文化

論点を再び既成封建社会の問題に戻そう。農民解放 (Bauernentlassung) がドイツでは、隣国フランスの革命(一七八九年大革命、一七三〇年七月革命、一七四八年二月革命)の側庄の下に、十九世紀において、しかも国家の介入によりようやく進行するのであるから、本論の扱う一八〇〇年頃には未だ話題とならない。一七八九年の人権宣言 (Déclaration des droits de l'homme et du citoyen) が、ギルト (corporation: Zunft) の解体と農民解放の要因となったが、いずれの点においてもドイツはフランスに相当たちおくれたからである。むしろここでは、後世に廃止されるべき政治・経済上における農民の負荷を考えることにより、貴族の特権を明らかにしておきたい。農民の貴族への従属関係は主に、土地領主制 (Grundherrschaft) と人身支配制 (Leibeigenschaft) と裁判支配権 (Gerichtsherrschaft) に根ざっていた。領邦ヴェルテムベルクの場合は、裁判支配権を領邦領主が一手に掌握しており、この裁判領主 (Gerichtsherr) は裁判隸民 (Gerichtsunterlane) である農民に対し、例えば無賃の賦役を課する形態で富を合法的に搾取し得た。基本的人権という考えに根ざしていない封建制下では、農民の人身も土地も貴族の所有物なのであるから、人身領主 (Leibherr) である貴族に、隸属民 (Leibeigene) である農民が、死亡税、譲与税、借

地料を貢納するのは社会的義務とされていた。例えば、大十分の一税 (Große Zehnte) として農民は領主に穀物を貢納し、小十分の一税 (Kleine Zehnte) として野菜などを教会に貢納した。他方、都市からも市場税などの関税 (Zoll) をはじめとし、様々な封建的貢租を領主は取り立てることができたのである。

宮庭の華麗さはこのような基礎の上に成り立っていたと考えることができる。しかもプロイセンの土地貴族 (Junker) のように隷屬農民を従えて封建的大農場 (グーテン) 経営 (Gutsherrschaft) を行なう貴族は、ヴェルテムベルクのようなフランス寄りの南西ドイツには見い出せず、富裕な貴族は宮庭に集って領主をとりまき、上流貴顕はフランス王宮の社交会を模範として、夜会や催物に熱中していたと考えられよう。例えばこの様子は、Wolfgang Amadeus MOZART: モーツァルト (一七五六年—一七九一年) の歌劇『ドン・ジョヴァンニ (Don Giovanni)』(一七八七年初演) における仮面舞踏会 (Ballo in maschera) (第一幕、第二十場、Eulenburg 版、二六九頁以下) とか、ゲーテの『ファウスト』第二部・第一幕における皇帝の宮城 (Pfalz) の広間における仮装舞踏会 (Mummenschanz) (第五〇六五句以下) などに余韻を残していると考えられよう。

このような封建貴族と並んで、首都シュトゥットガルトの場合には都市貴族に言及しないわけにはゆかない。もっとも、都市貴族と言っても、シュトゥットガルトは帝国都市ではなく、領邦領主の宮庭のある領邦都市であるから、ハンブルクやジュネーブ (Genève) におけるような本格的な都市貴族 (Patrizier: patricien) ではない。しかし、経済・政治面で影響力のある都市の門閥という点でこの両者は大同小異と考えられよう。ところで、ヴェルテムベルクは政体において一五一四年来、一応立憲君主国 (Verfassungsmonarchie) となっていた。立憲君主制と言え、王権に封建貴族が制限を加えた一二一五年のイギリスの大憲

章 (Magna Carta) が有名であるが、ヴェルテムベルクの歴史では、一五一四年のテュービンゲン契約 (Tübinger Vertrag) が、この領邦国家の大憲章に相当し、立憲君主制の基礎をなしていた。ちなみに、これはイギリスのマグナ・カルタのように支配者と封建貴族との間の憲章ではなく、領主と領邦民会 (Landschaft) との間の契約であった点が注目に値する。領邦民会とは、ほとんど都市の市民 (Bürger: ciotoyen) により構成された百名余の集会であった。この際、シュトゥットガルトやテュービンゲン (Tübingen) のような先導的な都市が主導権を握っていたと考えられる。このような都市の指導者と領邦領主との間に結ばれたテュービンゲン契約では、例えば主要な戦争の場合には民会の同意が必要であるとか、税率に関する民会の課税承諾権や民会独自の財政権が認められ、かくして民会は宮庭と並び得る政治・経済的権力となったのである。

ところが民会とは言っても、家際この権力の中枢にあったのは少数の常任委員であった。常任委員会とは、八名の小常任委員会 (der Kleine Ausschub) と、これに更に八名が加わった計十六名の大常任委員会 (der große Ausschub) であったが、実際に権限を行使した幹部は小常任委員会の八名であった。しかも、この幹部の実質的指導者は、その高官 (höherer Official) である顧問役 (Advokat) と相談役 (Konsulent) なのであった。

古い時代と新しい時代とを通じてこの民会にあらゆる悪徳をもたらしたのは、とりわけ高官の越権であった。常任委員会は自分たちに代って語り、また書いてくれ、そして困った場合には考えとくれさせようとする人々をもつことを非常に便利と心得ざるをえなかった。この間において常任委員会の大部分は安閑として自分たちの収入を食いつぶした。ことこのついでに自分たちの魂の救いのために配慮はしたものの、彼らは民会の職務はこれを撰理と指導者とが欲する成り行きのままにまかせた。羊飼いのうち或るものが東に、他のものが西に導こうとするときには、いうまでもなく哀れな羊たちは惨めである。また餌場への鍵

をもち、しっかりと声でいざない、羊の皮の下に狼の性質をいとも巧みに隠すべしを得ているものに、大部分の委員が従ったのも自然の成り行きである。このようにして、委員会と、そしてこれと共に邦土とは前者の役人によって鼻をつままれ、なぶりものにされたわけである。

常任委員会それ自身は決して専横ではなかった。そうであったのは、その相談役や顧問役である。委員会はただ怠慢で思慮を欠き、彼らのあらゆる独裁に名を貸しただけである。委員会をして宮庭に対して寛大な態度を取るよういざなったのも彼らであった。そしてこの寛大さと同罪であるのは、かかる献身的態度を弁明するために、彼らのあげた気紛れさ加減以外のものではない。宮庭が歓心を買おうとした相手もまさに彼らであった。なぜとて、顧問役や相談役を自家薬籠中のものにしておくことができれば、宮庭は確実に自分たちの目的を遂げることができるところからである。個々の身分の訴願や請願を取上げるかどうかをきめるところのものも彼らであったし、到着した公文書を横領して、その存在を常任委員会に長く隠匿しておいて、自分たちの都合がよくなくなって初めて事態を陳述したのも彼らである。ほんとは、どんな僧侶でも、その懺悔者の良心に対して、この政治上の聴罪師が常任委員会族の公職上の良心に対するよりも大きな力を及ぼしたことはない。

(金子武蔵訳、上巻、二二頁―二三頁)

これはヘルダーリンの畏友ヘーゲルの政治論文の断片『ヴュルテムベルクの最近の内情について (Über die neuesten inneren Verhältnisse Württembergs)』(一七九八年)における現状分析である (Werke, 第一巻、二二頁―二七頁)。この同時代の資料により、ヴュルテムベルク民会の事態が手に取るように解かる。すなわち、ヘーゲルによれば、高官である顧問役と相談役がヴュルテムベルク民会の癌腫なのであった。彼は直接名指をしてないが、当時権力の座にあったのは、Friedrich Amandus STÖCKMEIER: シュトックマイヤー (一七三一年―一八三三年) であり、一七七〇年に顧問役となり、一七九一年には女婿 Konradin ABEL: アーベル (一七五〇年―一八三三年) を相談役として完全に実権を掌握した。隣国フランスの第一共和制 (一七九二年―一八〇四年) の援助協力を期待して領邦国家ヴュルテムベルクに所謂

「シュヴァーベン共和国 (Die Schwäbische Republik)」建設が話題となるまでに至った革命期の一七九七年に、シュトックマイヤーは民会の民主勢力により一時的に解任されたものの、やがて一八〇〇年に早々復職しているのである。この間、フランス共和国の外交筋は、宿敵オーストリア (Österreich) を睨んで、シュヴァーベンの共和主義者を見捨て、領邦ヴュルテムベルクの宮庭と結託したのである。とにかく、シュトックマイヤーのような都市貴族と宮庭との癒着は、彼等に共通の会合を好ましいものとする。従って、『パンとぶどう酒』冒頭で語られる「松明を飾して疾駆する馬車 (mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen)」に乗っているのが、宮庭の封建貴族だけとは限らないのである。

思想詩・第二句の疾駆する馬車の行先として想像されるのは、まず歌劇 (Oper) と演劇 (Drama) の開催の場、すなわち劇場 (Theater) であろう。ヴュルテムベルクはドイツ諸領邦の中でもフランス寄りの国であるから、フランス王国 (一七九二年王権倒壊、一七九三年国王斬首まで) の洗練された宮庭の社交趣味 (Préciosité) の支配を相当強く受けていたと考えられる。当時の衣装の華美は、例えばモーツァルトの歌劇を通して伺い知ることができ、事態は果たして、観劇に来るといふよりも、むしろ劇場へ自分の華麗さを示すために繰り出すと言う方が適切と思われるほど微に入り細を穿った奢侈品を身に付け身に纏い、観劇の場へと門閥が訪れたと考えられる。

既に (一三) (1) に述べたような高価 (précieux) な密蠟燭の裝飾用釣燭台が輝く劇場で、見る側においても見られる側においても、華麗な出で立ちが目立つ劇 (spectacle) は、舞台装置においても照明効果においても相当の贅沢を要求する。門閥はこれに消費を惜しまず、むしろこの機会を富と特権的豊かさの確認のために活用していたと考えられよう。西欧の当時の劇場は、座席の位置次第で、視覚効果のみならず音

響効果も相当左右される。個人用の着替室 (garde-robe) まで付いた特別座席から、天上棧敷 (troisième galerie) の立見席に至るまで、差別に手が込んでいて、有利な席であればある程、利点が多い仕組になっているのである。これは言わば特権主義の権化と看做し得よう。本論ではこれを「オペラ文化 (Kultur der Oper)」という名称で特徴づけておきた。

※ところで、この「オペラ文化」という表現で私は、Friedrich NIETZSCHE: ニーチェ (一八四四年—一九〇〇年) の瞳目すへきギリシア論「悲劇の誕生 (Die Geburt der Tragödie)」(一八七二年) 第十九章 (Kritische Studienausgabe. 第一巻、一二〇頁) を念頭に置いているのであるが、ニーチェがこの表現に与えた彼独自の定義に全面的にこぞ従っているわけではない。蓋し、本居宣長 (一七三〇年—一八〇一年) の卓抜した詩論「源氏物語玉の小櫛」(一七九六年) に云う至言「ものあはれ」に顕著な例が見い出せるように、表現に到ることが文学研究においては極めて学術的意義が深いことであるので、ここで独文学上の鬼才ニーチェに言及するのも無意味ではなからう。

以上の諸点をよく留意して、思想詩「パンとぶどう酒」の第四筋(第五句—第七二句)に目を向けてみよう。ここでは古典ギリシア世界が西欧にとって「至福なるギリシア (Seeliges Griechenland)」として召喚されている。詩人は反問を繰り返しながら次第に、Martin HELDEGGER (ハイデガー) の二言「ギリシア人の思想詩」より厳密に言えば、ギリシア人の存在と(その存在に帰属する)現存が本来うち建てられたあの詩作、すなわち悲劇 (ein denkerisches Dichten der Griechen und zwar jenes Dichten, in dem das Sein und (das zugehörige) Dasein der Griechen sich eigentlich stiftete: die

Tragödie.)」(形而上学入門 (Einführung in die Metaphysik)) 一九五三年、一一〇頁) への的を絞ってゆく。

五五 Seeliges Griechenland! .....

- 五九 Aber die Thronen, wo? die Tempel, und wo die Gefäße,  
Wo mit Nectar gefüllt, Göttern zu Lust der Gesang?
- 六〇 Wo, wo leuchten sie denn, die fernhinführenden Sprüche?
- 六一 Delphi schlummert und wo tönet das große Geschick?
- 六二 Wo ist das schnelle? wo brichts, allgegenwärtigen Glücks voll
- 六三 Donnernd aus heiterer Luft über die Augen herein?
- 六四 Vater Aether! so riefs und flog von Zunge zu Zunge
- 六五 Tausendfach, es ertrug keiner das Leben allein;
- 六六 Ausgetheilt erfreut solch Gut und getauscht, mit Fremden,  
Wirds ein Jubel, es wächst schlafend des Wortes Gewalt
- 六七 Vater! heiter! und hallt, so weit es gehet, das uralt
- 六八 Zeichen, von Eltern geerbt, treffend und schaffend hinab.
- 六九
- 七〇

(第二巻、九二頁—九三頁)

至福なるギリシアよ!.....

六〇、だが玉座はどこに? 神殿は? どこに玉杯は? 神酒ネクターに溢れて、神々の歓喜のための詩歌は? .....

どこに、一体どこに輝いているのか、彼方をまで射抜く(アポローン神の弓撃のごとき)あの神託は?

テルポイは微睡んでいる——どこに轟くのかあの偉大な運命(モイラ)は?

どこにあの神速の運命は、どこで碎けるのか? 普遍の幸に満ちて、雷鳴とともに清澄の大気から眼界を過り、運命(モイラ)が突入して

六五、来るのはどこか? 父なる神気アイテールよ! かく叫び舌から舌へ言葉は翔んだ、幾重にも。この生を一人で担える者は誰もいなかった。



分有されて、このような富は歡喜となる。見知らぬ者とも取りかわし

て、それは歡呼となる。睡りつ言葉（ロゴス）の力は生育する。

父よ！ 清澄なる者よ！ この言葉は久遠の彼方まで響き渡るのだ。

この太古の

七〇、証は、父祖から伝来され、的を射て、創造的に下ってくる。

年間三百日の晴天（今日では西欧向け観光の標語）を誇るギリシアの碧空は、思想詩が繰返し語っている（第六四句、第六九句）ように、固有の「清澄な（heiter）」性格を有している。この大自然の晴れやかな性格が、古典ギリシア悲劇の誕生した母胎と考えられる。

この蒼穹の下での野外劇について、例の「オペラ文化」を睨み合わせ、ヘルダーリンが時代の予言者として讃えたルソーが『演劇論（Sur les spectacles）』（一七五八年）において興味深い論述を残している。ルソーはここで、ギリシア都市国家（ポリス）の共和制（République）を念頭に置き、戯曲（drame）と歌劇（opera）に関して次のように論究している（一八六頁—一八七頁）。

演劇が生まれたのは共和国においてです。共和国の胸のなかでこそ演劇が祝祭の真の姿で輝くさまが見られるのです。これほど多くの互いに愛し合い、永遠に結び合わされるべき理由をそなえた国民以上に、しばしば集まってお互いのあいだに楽しみと喜びの二つの絆を結ぶのにふさわしい国民が他にあるでしょうか。われわれはすでにこのような全人民的な祝祭をいくつもっています。さらに多くの祝祭があれば、私の喜びはつるばかりでしょう。だが、少数の人々を暗い洞穴に陰気に閉じこめるあの排他的な演劇は取り入れないようにしましょう。あの排他的な演劇は、沈黙と無為のなかで観客たちを落ち着きがなく身動きのとれない状態におきます。観客の眼には壁や剣の切先や兵隊たち、つまりは隷従と不平等の悲惨なイメージしか映らないのです。否、幸福な国民たちよ、あなたがたの祝祭はそんなところにはありません。あなたがたが集まって、あなたがたの幸福の甘美な感情に身をゆだねるべきところは野外です。大空の下です。あなたがたの快楽が女性的でも備兵的でもなく、拘束や利害を感じさせるものがない一つそれらの楽しみを損なわず、それらの楽しみがあなた

がたと同じように自由で高貴なものであり、太陽があなたがたの純粹無垢な演劇を照らしますように。あなたがたは太陽が照らすのにもっともふさわしい演劇をみずからの手でつくるのです。

（西川長夫訳、ルソー全集、第八巻、一五〇頁—一五一頁）

ルソーの祖国ジュネーブ市に、仏王国に倣った演劇の建設を自論んだヴォルテールとそれを支持した都市貴族たちに抗して、ここでルソーは謹厳な市民（citoyen）の立場から歌劇のように「少数の人々を暗い洞穴に陰気に閉じこめるあの排他的な演劇（ces spectacles exclusifs qui renferment tristement un petit nombre de gens dans un autre obscur）」を斥けている。それに対してルソーが、「野外での蒼穹の下（en plain air, c'est sous le ciel）」での「純粹無垢な演劇（innocent spectacle）」を、もはや劇と言うより、むしろ祝祭（fête）と呼んでいるのに注意を向けよう。ルソーの言う「全人民的な祝祭（fête publique）」として、古代ギリシアの野外での祝祭劇（Festspiel）がまず考えられる。実際これこそルソーの理想とした「太陽が照らすのもっともふさわしい演劇（le plus digne qu'il puisse éclairer）」であったと看做せる。ところで、この古代祝祭劇場の観客の数はどれくらいだったのだろうか。西洋古典の碩学の言葉に耳を傾けてみよう。

丘の斜面を利用して作られた観客席の収容人員数は、二万にも近いのであったと考えられる。

（中村善也『ギリシア悲劇入門』三頁）

この二万という数に注目しよう。これは本論で既に述べた（二）（三）領邦ヴェルテムベルクの首都シュトゥットガルトの人口（ライヒャルトに依ると一八〇〇〇人）を上回る数値である。従って、ギリシア野外劇場ならば、この領邦首都の市民全員が集うことができたのである。しかも、古代ギリシアの劇場は、素朴で、西欧の劇場のような豪華な装飾品

(裝飾用釣燭台など)が無く、また形において歌劇場のような円筒形ではなく、精緻な数学知識により案出された播鉢状すばちになっており、身を乗り出す危険を冒しても舞台全体を見ることができない西欧歌劇場の両翼の天上棧敷のように差別された劣悪な場はここに無く、例えば今尚残存するエビダウロス(Epidaurus)劇場では、舞台前面の合唱席(orchestra)で燐寸を擦る音も紙をくしゃくしゃにする音もすべて最上段の観客席まで聞きとれる仕組みになっているのである。先程言及した西欧の劇場の特権的な排他性(Exklusivität)とは好対象をなす「共和精神(Gemeingeist)」(ヘルダーリン、第一巻、三三四頁)の原理がここに確かめられる。

この「共和精神」は、閉ざされていない、開かれた性格を有している。思想詩「パンとぶどう酒」第七節の名高い表現「乏しき時代の詩人(Dichter in dürftiger Zeit)」(第一二二句、第二巻、九四頁)を、ここでは以上の脈絡から考えてみよう。乏しい(dürftig)とは閉鎖的であり排他的であり特権的である西欧世界の時空の特性としてここでは読みとれる。これに対して、思想詩では「至福なるギリシア」(第五句)が対置されている。この古典悲劇祝祭の時空への道程(第三節)において、詩人は「開かれた世界(das Offene)」にこうして語る。

- 四〇 Götliches Feuer auch treiber, bei Tag und bei Nacht,
  - 四一 Aufzubrechen. So komm! daß wir das Offene schauen,
  - 四二 Daß ein Eigenes wir suchen, so weit es auch ist.
- (第二巻、九二頁)

神々の焰も 昼となく夜となくわれらに  
起てと迫る。だから行こう、目を開かれた世界に放ち、  
おのれ固有のものを、たとえそれがどんなに遠くであろうと探し求め  
るために、

(手塚富雄訳、和訳全集、第二巻、一一〇頁—一一二頁)

この開かれた世界(das Offene)と云う未だ具体化されない語りは、やがてギリシアの地名の響きとともに、「開かれた海(das offene Meer)」(第四九句)として具象化される。

四九 Drum an den Isthmos komm! dorthin, wo das offene Meer  
rauscht

五〇 Am Parnas und der Schnee delphische Felsen umglänzt,

五一 Dort ins Land des Olympos, dort auf die Höhe Cithärons,

だから、地峽イストモスへと赴こう。彼の地、あの開かれた海が轟く  
(詩神の故里)パルナッソス山の麓へと、白雪が輝くデルポイ(に宮居すアポロンの神域)の巖へと、  
彼のオリュムポス(の神々)の国土へと、彼の(オイディプースが捨てられし)キタイロンの山間へと、

この「開け(das Offene)」を直視せんとする姿勢は、思想詩中央部で古典ギリシアの「至福なる神々(die seeligen Götter)」(第六節、第九二句)を讃える「天上の祝祭(das himmlische Fest)」(同節、第一〇八句)においても保持されている(第五節)。

- 八一 ... dann aber in Wahrheit
  - 八二 Kommen sie selbst und gewohnt werden die Menschen des Glücks
  - 八三 Und des Tags und zu schau'n die Offenbaren, ...
- (第二巻、九二頁)

……しかしやがて覆うことなく顕現して  
神々そのものが来る。こうして人間は幸福と  
昼とに慣れてくる、あからさまに顕現した者たちを観ることに。

(手塚富雄訳、和訳全集、第二巻、一一二頁—一一三頁)

「あからなまに顕現した者たち (die Offenbaren)」は文字通り《das Offene》である。第八一句はこれを、「覆うことなく顕現して (in Wahrheit)」と語り、真理 (Wahrheit) を開示 (das Offene) としつゝ示してゐる。この《Wahrheit》は、アレーティア (真理: ἀληθεια) に照応する。すなわち、覆われて隠蔽の中にあることを古代ギリシアでは、忘却 (λήθη) と考え、この忘却を否定し、日 (φάος) に由来した顕正 (φαίνεσθαι) として真理 (アレーティア) があらわれるとしたからである。Hädrav: プラトーン (前四二七年—前三四七年) の Σοκράτης: ソークラテース (前四七〇年—前三九九年) が語る想起 (ἀνάμνησις) 説はその代表的なものである。

※『ヘイトロス (Φαίδρος)』二四九B—二五〇A、『ヘイトーン (Φαίδων)』七一E—七三B、等

思想詩中央部で歌われている開かれた祝祭をヘルダーリンが一層うち開かれた時空の中で朗々と激みなく歌いあげたのは、思想詩 (一八〇〇年—一八〇一年) にひきつづいて創作された讃歌『平和の祝祭 (Friedensfeier)』(一八〇二年) におおつてである。

- 一、 Der himmlischen, still wiederklingenden,
- 二、 Der ruhigwandelnden Töne voll,
- 三、 Und gelüftet ist der altebaute,
- 四、 Seeligewohnte Saal: um grüne Teppiche duftet
- 五、 Die Freudenwolk' und weithinglänzend stehn,
- 六、 Gereifester Früchte voll und goldbekränzter Kelche,
- 七、 Wohlangeordnet, eine prächtige Reihe,
- 八、 Zur Seite da und dort aufsteigend über dem
- 九、 Geebneten Boden die Tische.

(第三卷、五三三頁)

この世のものならぬ気高い音調は、しずかに反響を返しながら

やすらかな旋律をただよわせ、  
遠い代に建てられた至幸の者たちのための広間は  
ひろびろと開かれている。  
歡喜の雲はただよい、遙かまで輝く  
食卓の華麗な列は  
豊熟の果実や金の花糸で飾られた杯のあまたを載せて、  
平坦にひろがるゆかを統べて、そこにここに  
姿よく立ち並んでいる。

(手塚富雄訳、和訳全集、第二巻、一七三頁)

「ひろびろと開かれている (gelüftet)」(第三句) と語るに値する詩空間の開けが、ルソーの語る「祝祭の真の姿 (un véritable air de fête)」(前掲『演劇論』) を見事に具現し、思想詩に歌われた「清澄な (heiter)」時空に諧調をなして協和していると言えよう。

#### (4) 変貌する社会

前述のような祝祭空間へと志向する思想詩における都市の姿は、既存の封建体制下に勃興しつつある謹厳な市民社会の原画 (Urbild) と看做し得よう。ところで、このような原画の表現に相応する理論づけは恐らく、ヘルダーリンの詩論『滅びのなかで生まれるもの (Das Werden im Vergehen)』(一七九九年) に見い出せるのではないかと思われる。この詩論で詩人は「祖国 (Vaterland)」について次のように語る。

祖国のこの没落、なごしは、この意味での変遷 (Dieser Untergang oder Übergang des Vaterlandes) は、既存の世界の四肢におおつて感取から、その様は、この既存のものが解体 (sich das Bestehende auflöst) する瞬間と度合りに応じて正に、新しく勃興するもの、若々しいもの、可能なもの (das Neuentretende, Jugendliche, Mögliche) が感取されるという具合なのである。

(第四卷、二八二頁)

去りゆく「既存の世界 (die bestehende Welt)」が思想詩では「松明で飾られ、騒然と馬車が過ぎ去る (Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg.)」(第二句)にやがて象徴され、詩人が見守る世界は「やちやかな」燈火に照らされた街路 (die erleuchtete Gasse)」(第一句)や「満ち足りて家路へと歩む人々 (Satt gehn heim …… die Menschen)」(第三句)、「和やかに家にくつろぐ家長 (ein sinniges Haupt \ Wohlzufrieden zu Haus)」(第四句—第五句)にやがて映じ出されてくる。ここでは詩人の優しい肯定的な眼差が、瑣末な描写 (Beschreibung) に専心することなく、的確な直視により無駄口を慎み、沈思あつて始めて浮き彫りにされる映像により、何気ない市民生活の場を一幅の芸術作品に仕上げていると言えよう。

蓋しこの肯定的な市民社会の表現は、西欧精神史の開かれた空間、とりわけ「ギリシア」へと雄飛する試金石でもある。『悲劇の誕生』におけるニーチェの鋭い批判に見られるように、ギリシアへと憧れる宮庭詩人の上気した激昂(例えば、ゲーテ『ファウスト』七四三三句—七四四五句のヘレナ憧憬)では、「ギリシアの魔の山へと至る魔門を打ち破るに成功し得ず (nicht gelingen durfte, jene verzauberte Pforte zu erbrechen, die in den hellenischen Zauberberg führt.)」(第二十章)、「盗地タウリスからゲーテのイフィゲーニエが海の彼方の故国ギリシアへと向けたあの憧憬の眼差以上には達しなかつた (nicht weiter gekommen ist als bis zu jenen sehnsüchtigen Blick, den die Griechische Iphigenie vom barbarischen Tauris aus nach der Heimat über das Meer hin sendet.)」(同章、上掲、批判版、第一卷、一三二頁)のであるが、これとは打って違って、慎ましい内面への光明が、宮庭の華美からは遠い彼方を射抜く「パンとぶどう酒」の詩句は、莊嚴な古典祝祭悲劇の時空へと通ずる祈りの基底 (Glaubensabgründtiefe) として思想詩冒頭に控え、「ギリシアの本質の核心へと推参し、ドイッ

文化とギリシア文化との間に永続するエロース(愛)の絆を結ぶため (in den Kern des hellenischen Wesens einzudringen und einen dauernden Liebesbund zwischen der deutschen und der griechischen Cultur herzustellen.)」(同章、同卷、二一九頁)の希望の光を投げかけらるやうである。

※この脈絡は、高知大学学術研究報告・第二七卷所収 TAKAHASHI, Katsumi: Eine Betrachtung über das „seeilige Griechenland“ in Hölderlins „Brod und Wein“ — „das große Geschick“ als Höhepunkt. (一九七九年)を参照。

ところで、このように古典文化の開けへと雄飛する市民社会の原画は、あくまでそれに相応しい歴史的現実根ざしたものであり、架空の現実 (Utopia) や回顧的空想 (例えば、ロマン主義の中世回顧) ではない。従って、この思想詩の表現は、本論が既に言及したような一定の時代の社会の在り方を前提として始めて意味を持つものである。市民社会の在り方が変れば、自ずとその社会の原画も変貌を蒙るのである。例えば、同じ夕暮の都市の姿を歌つても、思想詩 (一八〇〇年—一八〇一年) 成立の半世紀後、すなわちヘルクスが「疎外された労働 (die entfremdete Arbeit)」(三)(1)既出)を緻密に分析した十九世紀中葉では、すでに社会の亀裂が詩人の表現に影をなげかける。

I' Voici le soir charmant, ami du criminel;

II' Il vient comme un complice, à pas de loup; le ciel

III' Se ferme lentement comme une grande alcôve.

IV' Et l'homme impatient se change en bête fauve.

五' O soir, aimable soir, désiré par celui

六' Dont les bras, sans mentir, peuvent dire: Aujourd'hui

七' Nous avons travaillé! — C'est le soir qui soulage

- 八 Les esprits que dévore une douleur sauvage,  
 Le savant obstiné dont le front s'alourdit,  
 Et l'ouvrier courbé qui regagne son lit.
- 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八
- Dependant des démons malsains dans l'atmosphère  
 S'éveillent lourdement, comme des gens d'affaire,  
 Et cognent en volant les volets et l'auvent.  
 À travers les lueurs que tourmente le vent  
 La Prostitution s'allume dans les rues;  
 Comme une fourmière elle ouvre ses issues;  
 Partout elle se fraye un occulte chemin.  
 Ainsi que l'ennemi qui tente un coup de main;  
 Elle remue au sein de la cité de fange  
 Comme un ver qui dérobe à l'Homme ce qu'il mange.  
 On entend cà et là les cuisines siffler,  
 Les théâtres glapir, les orchestres ronfler,  
 Les tables d'hôte, dont le jeu fait les délices,  
 Semplissent de catins et d'escrocs, leurs complices,  
 Et les voleurs, qui n'ont ni trêve ni merci,  
 Vont bientôt commencer leur travail, eux aussi,  
 Et forcer doucement les portes et les caisses  
 Pour vivre quelques jours et vêtir leurs maîtresses.
- Recueille-toi, mon âme, en ce grave moment,  
 Et ferme ton oreille à ce rugissement.  
 C'est l'heure où les douleurs des malades s'aigrissent!  
 La sombre Nuit les prend à la gorge, ils finissent  
 Leur destinée et vont vers le gouffre commun.  
 L'hôpital se remplit de leurs soupirs. — Plus d'un  
 Ne viendra plus chercher la soupe parfumée,  
 Au coin du feu, le soir, auprès d'une âme aimée.
- Encore la plupart n'ont-ils jamais connu  
 La douceur du foyer et n'ont jamais vécu!  
 (Bibliothèque de la Pleiade. 第一卷 九四頁—九五頁)

犯罪人の友である、氣持の好い夕暮が来る。  
 共犯の男のやうに、こつそりと忍び寄る。大空は  
 廣々とした闇房のやうに、静かに閉されて、  
 苛々と待ちかねてゐた人間は、野獸と變る。

五、

おお、夕暮よ、『今日もよく働いたぞ』と、心から  
 腕を叩いて、しみじみと言ひ得る人が待ち望む  
 愛すべき夕暮時よ。——残酷な苦惱に噛まれた  
 人々を、額を重く垂れ下げた、執念深い  
 學究を、背中を曲げて疲れ果て、寝床に戻る  
 職工を、慰めるもの、それはこの夕暮時だ。  
 だがしかし、大氣の中には、邪惡な惡魔が  
 實業家のやうに鈍重に眼を醒まし、  
 飛び翔つて、鎧扉や窓の庇を叩いて廻る。  
 風が激しく揺り動かす微光を横切つて  
 賣春が、小路小路に、灯をともし、  
 蟻塚のやうに四方に出口を開け、  
 襲撃を企てる敵の軍勢さながらに  
 到る所に、隱密な通路を拓き、賣春は  
 人間を食ひ物として掠め取る蛆蟲のやうに  
 泥濘の都會の芯に、蠢いている。

一五、

此處彼處に聞えるのは、調理場の甲高い音、  
 劇場の金切り聲や、オーケストラの解のうなり。  
 賭博が何より樂しみの、安料理屋の卓子は  
 淫賣婦と、その相棒の詐欺師が集り、

二一、

休息もなければ情容赦もない泥棒どもは、  
 やがて、その仕事に、奴等も取掛らうし、  
 扉や金庫の錠前を、音も立てずに抉開けて  
 幾日かの食ひ扶持と情婦の著物を稼ぐだらう。

二五、

この莊重な時に、わが魂よ、瞑想して、  
 喧噪に、お前の耳を塞ぐがよい。  
 病人の苦痛が今や鋭く掻立てられる時なのだ。

三〇、

陰鬱な夜は 彼等の喉を締め上げる。宿命を  
終へて 彼等は共同の深淵に向つて沈んでゆくのだ。  
病院には 彼等の吐息が充滿する。——また一人ならず、  
夕暮に、愛する人の傍らの 燐燐のほとりに、  
蕪高いスープを求めて歸ることが 出来なくなるのだ。

三七、

それどころか大勢の人たちは 嘗て燐燐の樂しさを  
味つたことがなかつた。生きたことさへ無かつたのだ。

(鈴木信太郎訳、二八五頁—二八七頁)

この詩歌は「黄昏 (Le crépuscule du soir)」と題された Charles BAUDELAIRE: ボードレー (一八二一年—一八六七年) の詩で、仏文学史上の古典詩集「悪の華 (Les Fleurs du mal)」(一八五七年初版) の第六七番(一八六一年の再版では第九五番) 目に置かれ、一連の詩とともに「パリ描写 (Tableaux parisiens)」と題する章に提出される。ここにはヘルダーリンの思想詩とは異なった社会背景が控えていると考えられる。すでに夕暮の情緒の不気味な始まり「夕暮は共犯者のように獲者を狙う狼の足どりで密やかに忍び寄り」(Il vient comme un complice, à pas de loup) (第二句) が矛盾相克する市民社会の罪となつてゐる。「背中を曲げて疲れ果て寢床に戻る職工 (l'ouvrier courbé qui regagne son lit)」(第十句) と「実業家のように鈍重に眼を醒ます邪悪な悪魔 (des démons malsains …) S'éveillent lourdement, comme des gens d'affaire)」(第十一句—第十二句) とがくつきりと対置され、「疎外された労働」(マルクス: 本論三(1)参照) の生々しい姿を浮き彫りにしてゐる。「ひっそりと街路に燈火がともり (still wird die erleuchtete Gasse)」(思想詩・第一句) に対し、「悪の華」では、「売春が街路、街路に灯を点す (La Prostitution s'allume dans les rues)」(第十五句)。

ボードレーとはほぼ同世代のマルクスは、「経済学・哲学草稿」

(一八四四年)の第三草稿で、「水中の魚のようにくろいだ (so heimisch, als der Fisch im Wasser)」(洞穴の未開人 (Der Wilde in seiner Höhle))の生活に対比して、貧しい都市労働者の生活の惨めさを述べ、その疎外現象について次の分析を行っている。

だがこの貧乏人の地下室<sup>地下室</sup>住居は、或る敵対する力 (Element) すなわち、彼の寄血を絞つてのみ与えられる疎遠な力 (fremde Macht) を保持している住居である。彼にはこの住居を自らの故郷と看做すことが許されず、「ここでくろろげる (hier bin ich zu Hause)」などとは決して言えないのである。むしろここで、彼は或る別人の家、すなわち或る疎遠な家に居るのであって、この他人が毎日ひそかに動静をつかがついて、貧乏人が家賃を支払わないと路上へ放り出すのである。

(Werke, 補巻, 第一部, 五五四頁)

このような十九世紀中葉の西欧資本主義社会において、「パンとぶどう酒」冒頭に描かれたような、「満ち足りた帰宅 (Satt gehn heim)」(第三句) とか「和やかに家にくろろぐ (Wohlaufrieden zu Haus)」(第五句) 姿はいささか現実から遊離した感を懐かせたのであろう。史的唯物論の哲人も、象徴詩の鬼才もともに新たな社会の動静に目を留めながら、その中で「滅びのなかで生まれるもの (Das Werden im Vergehen)」(前述ヘルダーリン詩論題名) を直視するのみであった。以上のように十九世紀文学の鬼才により先駆的に表現された新たな時代の疎外された都市像は、後に今世紀の文学において更に新たな詩歌の衣を纏うことになる。ここでは新たな局面を示す例として、現代ドイツ詩歌から Rainer Maria Rilke: リルケ (一八七五年—一九二六年) の庄巻「ドゥイーンの悲歌 (Duineser Elegien)」(一九二二年) 第十歌、第二節で歌われた「悩みの都市 (Leid-Stadt)」に着目してみよう。

- 一六 Freilich, wehe, wie fremd sind die Gassen der Leid-Stadt,
- 一七 wo in der falschen, aus Übertönung gemachten
- 一八 Stille, stark, aus der Gußform des Leeren der Ausguß,
- 一九 prahlt der vergoldete Lärm, das platzende Denkmal,
- 二〇 O, wie spurlos zerträte ein Engel ihnen den Trostmarkt,
- 二一 den die Kirche begrenzt, ihre fertig gekaufte:
- 二二 reinlich und zu und enttäuscht wie ein Postamt am Sonntag.
- 二三 Draußen aber kräuseln sich immer die Ränder von Jahrmart.
- 二四 Schaukeln der Freiheit! Taucher und Gaukler des Eifers!
- 二五 Und des behübschten Glücks figurliche Schießstatt,
- 二六 wo es zappelt von Ziel und sich blechern benimmt,
- 二七 wenn ein Geschickterer trifft. Von Beifall zu Zufall
- 二八 tannelt er weiter, denn Buden jeglicher Neugier
- 二九 werden, trommeln und plärn. Für Erwachsene aber
- 三〇 ist noch besonders zu sehn, wie das Geld sich vermehrt, anato-  
misch,
- 三一 nicht zur Belustigung nur, der Geschlechtsteil des Gelds,
- 三二 alles, das Ganze, der Vorgang —, das unterrichtet und macht
- 三三 fruchtbar .....
- 三四 ... Ober gleich darüber hinaus,
- 三五 hinter der letzten Planke, beklebt mit Plakaten des  
"Todos",
- 三六 jenes bitteren Biers, das den Trinkenden süß scheint,
- 三七 wenn sie immer dazu frische Zerstreungen kau'n ....
- 三八 gleich im Rücken der Planke, gleich dahinter, isis wirklich.
- 三九 Kinder spielen, und Liebende halten einander abseits,
- 四〇 ernst, im ärmlichen Gras, und Hunde haben Natur.

(Sämtliche Werke. 第一卷' 三〇三頁—三〇四頁)

もがらん 悲しいかな 「悩みの都市」の巷はなんと異様なことだらう  
そこではうち消しあう喧騒から生まれた偽りの静寂のなかで  
空虚の鋳型からの鋳造物 金メッキの騒音が  
破裂する銅像が 威張って立っている  
二〇 おお 天使なら跡形もなくその「慰安の市場」を踏みこぼしてしまっ

- 二一〇 だろっ  
この「市場」と境を接しては出来合いで買われた教会が  
小ぢっぱりとして 閉ったまま まるで日曜日郵便局の  
ように幻滅して立っている  
外にはしかし「歳の市」の境がいつも波うつっている  
自由のブランコや 熱望の潜水夫と奇術師たち！  
めかしたてた幸福の射的場  
二一五 ひとりの器用な男が射当てる 的の人形は  
手足をゆすぶって プリキの音をたてるのだ 喝采から偶然へと  
そうして彼はよめいてゆく なせならあらゆる好奇心の小屋掛けがお  
客を招んだり 鼓を打ったり わめいたりしているからだ だが  
大人たちには  
二二〇 さらに特別の見せ物がある 金銭はいかにして繁殖するか 解剖学的で  
これは単なる娯楽の見せ物ではない 金銭の生殖器を  
すべてを なにもかも 一部始終を それは見せるのだ——これは教  
育になる  
三〇 三〇 三〇 三〇  
三二〇 三二〇 三二〇 三二〇  
三三四 おお だが そのすぐ向うには  
飲む者がいつも新鮮な「気晴らし」をつまみに啣っていれば  
甘い味がするように思われる ああ「不死」という苦いビール  
の 広告が貼ってある最後の板塀の向うには  
そのすぐ背後 すぐその向うには真実がある  
そこでは子供らが遊び 恋びとたちは寄りそって——離れたところで  
真面目な顔つきをしながら とぼしい草地に坐り そして犬たちは自  
然のすがたをしている  
四〇 (富士川英郎訳、和訳全集、第三巻、五三頁—五四頁)
- 思想詩「パンとぶどう酒」冒頭で、慎ましい燈火の光 (Erleuchtung)  
の下に照らし出された生育する市民社会の都市像は、ボードレールの詩  
歌「黄昏」で、新たな疎外された局面から抉る批判精神の倦むことなき切  
り入みにより、日常の自然性を悉く剥奪され、烈しい屈曲を得て如実な  
裏面を晒す。かく斥力が聞き合う緊張ある解体の諸相から「悪の華  
(Les Fleurs du mal)」の妖艶な芳香が漂うこととなる。しかし尚

ここでも、あくまで都市像そのものの中から新たな美の「華」が拾われ  
ており、都市を成り立たせる庶物が、ただ既成の価値意識の滅びの中  
から、異彩を放って新たに誕生しているのである。

Où tout, même l'horreur, tourne aux enchantements.

(„Les Fleurs du mal“ Tableaux parisiens, フラナー  
版、八九頁)

そこでは、あらゆるものが、恐怖さえも魅惑となる。

(ポーツェル『小ちき老妻たち (Les Petites Vieilles)』  
第二句)

このように「悪の華」では、それまでの既成の美意識の価値規準の下に  
隠れ、等閑視されていた都市像の別の断面が切り開かれたのであって、  
決して都市像そのものがその根底から瓦解したわけではなかったのだ  
る。

ところが、リルケの「悩みの都市」では、都市の庶物は真向から敢然  
と弾劾され、仮借ない峻厳な拒否の眼差しで見据えられている。「跡か  
たもなく天使が踏みしだくであろう (spantos zerträte ein Engel)』  
(第二〇句)と云った、非現実をも内包する接続法の語気がこの気概を  
如実に伝える。このように都市像は突き離され、詩歌の語気の背後に歌  
心が消えてしまえば、文明批評の散文に過ぎなくなるような不安定で危  
険な地平で言葉は「よろめいて歩いている (taumelt)』(第一八句)。

このような「悩みの都市」の道程の果に、やさやかな転調が来る。引  
用の最終行である第四〇句末を、「自然 (Natur)」と云う素朴な言葉  
が締め括る。ところで、この「自然」の所在は、「草地 (Gras)』(第  
四〇句)である。ここで興味深いのは、「石材にて築き上げられた  
(Steinen aufgebaut)』(二二) (1) 既出) 都市の都市たる由縁の所か  
ら、何ら生育する契機が熟していない点である。この「自然」への転調

は、かくして都市の只中における都市外のものへの内的亡命 (Innere  
Emigration) を意味することになり、都市像の疎外化現象は、ここに  
至ってその極に達することになる。もはやここでは、都市像から「悪の  
華」さえ咲かないのである。

### 結 論

ヘルダーリンは通常、山河などの大自然を歌った詩人として名高い。  
『ドーナウ河の源で (Am Quell der Donau)』(一八〇一年)とか  
『ライン河』のような自由韻律讃歌を始め、『ネッカー河 (Der Neckar)』  
(一八〇〇年)や『縛りつけられた大河 (Der gefesselte Strom)』(一八  
〇一年)など自然讃歌は数多い。例えば、『ペンとぶどう酒』と同じ韻律の  
一行連句詩型で書かれた『帰郷 (Heimkunft)』(一八〇一年)冒頭の雄  
渾なアルプスの表現はそれらのうちでの白眉と看做し得よう。

- 一 Drinn in den Alpen ists noch helle Nacht und die Wolke.
- 二 Freudiges dichtung, sie dekt drinnen das gährende Thal.
- 三 Dahin, dorthin toset und stürzt die scherzende Bergluft,
- 四 Schroff durch Tannen herab glänzet und schwindet ein Stral
- 五 Langsam eilt und kämpft das freudigschauende Chaos.
- 六 Jung an Gestalt, doch stark feiert es den liebenden Streit
- 七 Unter den Felsen, es gährt und wankt in den ewigen Schran-  
ken,
- 八 Denn bacchantischer zieht drinnen der Morgen herauf.  
(第二卷、九六頁)

ここアルペンのさなかは、夜も雪白く雲かかる。  
そは、喜びを生みつつ、暗き谷の顎を覆う。



五、

その深みをめざして山気は戯れつつ躍りくんだり、  
 猛々しく縦の森を貫いて一筋の流れは、光りまた消えつつ走る、  
 ゆるやかに進み 烈しく進む。喜びに傾える混沌の  
 姿は幼くとも逞しく、岩々のもと 愛に駆られる争いを祝福しつつ、  
 永遠の軌道のうちに溢れわき立つ。  
 そこにいま朝は バッカスのように立ち昇る。

(手塚富雄訳、和訳全集、第二巻、一一八頁)

蓋しこの詩のように、ヘルダーリンの場合、大自然はあくまで意識の精神現象として、すなわち深い神秘に満ちた神話(ミュートス)として立ちあらわれているのが特色である。従って、ヘルダーリンを読む折に読者を纏む期待は通常このミュートスの世界へといつとはなしに繋がるように思われるのである。

このような脈絡から考えると、『パンとぶどう酒』冒頭の都市像がヘルダーリンにあつては稀有な表現であることに気付く。すなわち、ここには当時の現実が素朴に顔を出しており、どこにも神秘の色に彩られた神話の形姿が見あたらないからである。この点を訝しく思ったのである。ウァックヴィッツは「一八〇〇年頃の悲哀と理想」(三)(1)既出)において独自の解釈を試みて、この思想詩冒頭を神話世界へ誘おうと努めている。その論究(四六頁―四七頁)ではまず第二句の松明(Fakeln)に焦点があてられ、この照明手段の効果の無さと火災への危険が指摘される。続いて、松明が馬車に付属したものでなく、松明を飾して先行する騎手たち(vorausreitende Fackelträger)により担われているとか、また「一八〇〇年頃に登場した照明された市内馬車には角燈が使われる(Beleuchtete Stadtwagen, die um 1800 aufkommen, benutzen Laterne)」と言った歴史事実と思想詩冒頭の表現との矛盾から、この表現を「自然主義的描写(naturalistische Schilderung)」と解する難点を示される。「ならばこの表現は一体何を意味するか?」とウァックヴィッツは自問し、その解答を引き出すために、神話(Mythologie)

辞典を調べ、松明がヘルセボネー(Herseboner)の属詞として表記されている点に着眼した。そして「ヘルダーリンが恐らく使用したパンヤミン・クーペリットの『基礎神話辞典』(Das von Hölderlin wahrscheinlich benutzte „Grundliche Mythologische Lexikon“ von Benjamin Hederich)」(一七七〇年)の叙述などに注目して、図像学(Ikonographie)の題材として、冥界の王ハーデース(Hades)に馬車で連れ去られるヘルセボネーの神話が掘り起こされる。結論としてウァックヴィッツは、思想詩・第二句の松明(Fakeln)と馬車(Wagen)に関して、「松明を飾して騒然と去る馬車は、ヘルセボネー神話への秘教的暗示である(Die hinwegrauschenden fackelgeschmückten Wagen sind eine esoterische Anspielung auf den Persephone-Mythos)」と説明する。かくしてウァックヴィッツは、ヘルダーリンの「三行連句詩型(エレギー)全作品の隠れた主題、すなわち現実の営みのある地上界と、この営みにより抑圧された冥界との相互関係(das versteckte Thema des gesamten Elegenwerks, die Wechselbeziehung von Oberwelt, der gegenwärtigen Praxis, und der Unterwelt, dem von dieser Praxis Verdängten)」に言及し得たと考えたのである。恐らく類似の解釈は、思想詩・第九節の「松明を飾す者(Fakelschwinger)」(第一五五句、第二巻、九五頁)から連想されるディオニューソス・バッコス神話への遡及から、「バッコス祭の(松明の)焰(Eißou te rōn)」(ソポクレース「アンティゴネー」(Antigone) 九六四句)へと、またヘルダーリンの別の詩歌「シュトゥットガルト」(二)(3)既出)第十七句にある表現「自由な野獣の曳く(酒神ディオニューソスの)車のごとく(wie die Wagen, bespannt mit freiem Wilde)」(第二巻、八六頁)へと、思想詩・第二句の「松明」と「馬車」を関連づけるかも知れない。

このような解釈の基盤は例えば、ウァックヴィッツによる既出(三)

(1)のマルクス疎外理論の公式化のみならず、更には「パンとぶどう酒」に関する代表的な研究書にも見い出せる。すなわち既出(本論「序言」)のシュミットの『ヘルダーリンのエレギー「パンとぶどう酒」』でも、「忙しい生活の価値領域(Wertreich des geschäftigen Lebens)」が「崇高な精神的瞑想の生活の価値領域には踏みこめないものとして限定づけられており(abgegrenzt gegen den des hohen, geistesinnigen Lebens)」この二元論を解釈の基調として(三五頁)。

ひき続く詩行では、もはや昼の喜び(Freuden des Tags)については語られず、それとは全く別種である、夜の時代におけるディオニューソスの喜び(Dionysische Freude in nachtllicher Zeit)とて語られるのである。

と説明されている。この解釈もヴァックヴィッツの解釈と同様に、冒頭の都市像を思想詩の中心問題(例えば「至福なるギリシア」とは異質なものとてそれに対立させる姿勢を示している)。

ヴァックヴィッツにもシュミットにも共通な観点は、思想詩冒頭の日常性に裏付けられた都市像をそれ自体で意味ある世界像として考察せず、これをペルセポネー神話あるいはディオニューソス神話世界へと至る過程にすぎないと看做し、神話世界の絢爛たる想像の世界と比べれば見劣りする表象として、結局は「過ぎ去る」形象として片付けている点である。これに対し、本論の思想詩読解は異なった方向をとった。すなわち私は、日常性に裏付けられながらも内面への道を辿る冒頭の都市像に着眼し、その都市像の動静そのものの中に、「至福なるギリシア」(第四節)の「天上の祝祭」(第六節)へと至る道標の光明(Berleuchtung)を読み取るうとしたのである。私が「過ぎ去る」と看做したのは、絢爛たる「オペラ文化」の華美な出で立ちであった。このように私は、冒頭の都市像と中央部(第四節―第六節)の祝祭空間とを対立させることなく、この両者を二元的に解釈しようと努めたのである。従って、本論は、ヴァッ

クヴィッツやシュミットの二元論に対する異議申し立てと考えられるであらう。

ところで、このように二元的に思想詩を考察すると言ふことは、そこに対立を見ないで全一ばかり見出すことではない。敢て言うならば、思想詩ではあらゆるものが対立しあい拮抗しあっている。古典ギリシアとキリスト教西欧(Hellas und Hesperien)、『ディオニューソスとキリスト(Dionysos und Christus)』、『アポロンのものとディオニューソスのもの』(das Apollinische und das Dionysische)、『美と崇高の感情(das Gefühl des Schönen und Erhabenen)』、『天と地(Himmel und Erde)』、『理想と人生(das Ideal und das Leben)』、『昼と夜(Tag und Nacht)』等々、相互に対立し合っているのではあるが、しかし靈妙にも同時にこれが平衡を保って調和している点がある。詩人の雄篇の真骨頂である。詩人の美学論文「詩的精神のとるべき方法について(Uber die Verfahrungsweise des poetischen Geistes)」(一七九九年)の名高い術語を使えば、これは「調和的対立(das Harmonischengegensetze)」(第四卷、二六〇頁)と表現される。また「パンとぶどう酒」に関する研究でも、ディオニューソス像とキリスト像に関してこの調和的対立が論究されており(勝田泰弘「悲歌「パンとぶどう酒」におけるキリストとディオニューソス、関西大学、独逸文学、十九、一九七四年)、この微妙な問題に関して、「そこでは両者の調和が見られるが、決して統一されているのではない」(二三九頁)と巧みに言い中てられている。

実際、「パンとぶどう酒」における調和的対立の両極は遠く隔たっている。それは古典ギリシアとキリスト教西欧と言った精神史の機軸のみには限定されない。この精神史の難問にしても、美と崇高の問題にしても、いずれも詩人には親しみある題材である。思想詩において詩人は更に自らに疎遠(Fremd)な対象をも内に取り込もうとする。ヘルダーリ

んに疎遠なものとは何か？ それは既に解釈上の対立的二元論が一方の極に置いたもの、すなわち「崇高な精神的瞑想の生活」の外にある生活圏である。この日常性が思想詩冒頭では、むしろ積極的に取り入れられており、詩歌の世界に独自の時空が広がっていると考えられる。ところで、このような疎遠なもの、積極的な取り入れは、詩人が偶然に思い付いた無反省な行為なのだろうか。そのような疑念に対しては、ヘルダーリンの哲学・美学論文『エムペドクレスの基底 (Grund zum Empedokles)』(一七九九年)の次の箇所、明確な解答が見い出されよう。

Die fremden Formen müssen um so lebendiger seyn, je fremder sie sind, und je weniger der sichtbare Stoff des Gedichts dem Stoffe, der zum Grunde liegt, dem Gemüt und der Welt des Dichters gleich, um so weniger darf sich der Geist, das Göttliche, wie es der Dichter in seiner Welt empfand, in dem künstlichen fremden Stoffe verleugnen.

(第四卷 一五一頁)

疎遠な形式は疎遠であればある程、より生き生きと働きかけるに違いない。すなわち詩作品中の目に見える素材が、その基底にある素材である詩人の心情や世界に対して似ても似つかぬものであればある程、精神、すなわち詩人が自らの世界で感得した神性が、詩歌にあらわれる疎遠な素材の中において、より明確に表出され得るのである。

疎遠なものに対する詩人の積極的なかかわりがここにおいて十分に根拠づけられていると考えられよう。思想詩冒頭は、自己に対して疎遠なもの、このような調和的対立 (das Harmoniscentgegensetzte) によって始まり、詩想の展開は更にこう云った対立の相を内面の世界への道程において多岐にわたって深化させるのである。

自己に対して疎遠なもの、それは自己に対して否定的なものである。この否定の媒体を積極的に取り入れる姿勢、それはヘルダーリンの学友ヘーゲルが浪漫主義の美的観念論 (主にシェリングの同一哲学) を鋭く

批判して打ち建てた思索の全字塔『精神現象学 (Phänomenologie des Geistes)』(一八〇七年)における学究態度でもあった。ヘーゲルはその「序論」において「否定的なものの物々しい力量 (die ungeheure Macht des Negativen)」を次のように雄弁に物語る。

否定的なものの物々しい力量、それは思惟、すなわち純粹自我の威力 (Energie) である。彼の非現実を敢て死 (der Tod) と呼ぶなら、この死は最も畏怖に値する (das Furchbarste)。そして、この死 (das Tote) をしかとつかむには、最大の力 (Kraft) を要するのである。力無き美 (die kraftlose Schönheit) は知性 (Verstand) を憎む。なぜなら知性が、力無き美に能力以上のことを要求するからである。しかし、死 (der Tod) を厭う、荒廃 (Verüstung) からきれいさへ回避する生 (das Leben) ではなく、この死を耐え、この死の只中において自立する生が、精神の生 (das Leben des Geistes) なのであり、絶対的分裂 (Zerissenheit) の状態においてこそ、精神は真理 (Wahrheit) を獲得するのである。精神がこのような力量 (Macht) であるのは、否定的なものから目を逸らし、これは何でもないとか偽りであるとか言っただけ、別事に移ってゆくような肯定的なもの (das Positive) であるからではなくて、精神が否定的なものを直視し、この否定的なものに留まるからこそそうなのである。

(Werke. 第三卷 三六頁)

若き日々々にヘルダーリンと共に学び共に生活したドイツ古典哲学の巨匠ヘーゲルの言葉は、生々しい迫力を持って、思想詩『パンとぶどう酒』の本質に迫っていると私には思われる。ヘーゲルの言う「絶対的分裂 (die absolute Zerissenheit)」という言葉はヘルダーリンの詩作の核心に肉迫し、それに対立して語られた「肯定的なもの (das Positive)」は、ヘルダーリンが「滅びのなかで生まれるもの (Das Werden im Vergehen)」において語った「既存のもの (das Bestehende)」(三) (4) 既出) に呼応し、乗り越えられ滅びるべきものとして見据えられているのである。このような強靱な思索にこそ相応しい思想詩

には、夢想に溺れることのない知性の明鏡が詩想に光明を投げかけ、絵のような (pittoresque) 想像の翼に乗って天翔ると言った夢見心地の神話(ヴァットウヰツの例)のような甘えた想念は陰を潜めている。ここで詩人は世界の多彩に眩むことなく、現存 (Dasein) の基底 (Grund) へと沈没 (Besinnen) し、無反省な意識が無思慮に看過した礎に立ち、滅心のなかで生まれる現実を、敢て世界観 (Weltanschauung) とす言える直視におよびて見据えているのである。

参考文献 (ABC順)

阿部謹也：中世の窓から、朝日新聞社、一九八一年  
 Abel, Wilhelm: ヴァイトマンの詩論の三段階、三橋時雄／中村勝共訳、未来社、一九七六年。  
 Augustinus, Aurelius: De vera religione. Corpus Christianorum Series Latina. 第三三三卷、Augustini Opera. 第四卷、第一分冊、Daur, K.-D. 編、Turnhout (Brepols)一九六二年。：真の宗教、アウグスティヌス著作集、教文館、一九七九年來刊行中、第二卷、茂泉附男訳。：Die wahre Religion. Deutsche Schöninghsausgabe. Perle, Carl Johann 訳、Paderborn (Ferdinand Schöningh)一九五七年。  
 ————: Confessiones / Bekennnisse. Bernhart, Joseph 編訳 München (Kösel)一九五五年。：告白、山田龍訳、世界の名著、第十四卷、中央公論社、一九六八年。  
 ————: De Trinitate. 上掲、Corpus Christianorum. ラテン編、第五〇卷、Opera. 第十六卷、Moutain, W. J. / Glorie 共編、一九六八年。：三位一体論、中沢宣夫訳、東大出版会、一九七五年。：Über die Dreieinigkeit. Bibliothek der Kirchenväter. 第二集、第十三卷、第十四卷、Schmaus, Michael 訳、München (Kösel / Pustet)一九三五年—一九三六年。  
 Baiomi, Giuliano: „Marchen“—„Wilhelm Meisters Lehrjahre“—„Hermann und Dorothea“. Zur Gesellschaftsidee der deutschen

Klassik. Goethe-Jahrbuch. 第九一巻、Köster, Monika 訳、Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger)一九七七年。  
 Baudelaire, Charles: Les Fleurs du mal. Oeuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade。第一巻、Pichois, Claude 編、Paris (Gallimard)一九七五年。：悪の華、鈴木信太郎訳、岩波文庫、一九六一年。  
 Bayer, Erich: Wörterbuch zur Geschichte. Stuttgart (Kröner)一九七四年。  
 „Bayer“ Pflanzenschutz-Kurier: Die Kartoffel siegte doch ... 飯塚信雄／岩波融註、南江堂、一九六四年。  
 Bertaux, Pierre: Hölderlin und die Französische Revolution. Frankfurt am Main (Suhrkamp)一九六九年。  
 Böckmann, Paul: Hölderlin „Brod und Wein“。Die deutsche Lyrik: 所収、Dusseldorf (Angust Bagel)一九五六年。  
 Borst, Otto: Stuttgart. Die Geschichte der Stadt. Stuttgart (Aalen)一九七三年。  
 Bruford, W. H.: Germany in the eighteenth century. Cambridge University Press. 一九三五年。：十八世紀のドイツ、上西川原章訳、三修社、一九七四年。  
 Brunner, Otto: ユーロップの農民、ユーロップ—その歴史と精神、岩波書店、一九七四年。  
 ————: ユーロップ史における都市と市民、前掲書。  
 Dilthey, Wilhelm: フリードリッヒ・ホルダーリン、小牧健夫訳、体験と創作、下巻、岩波文庫、一九六一年。  
 Engels, Friedrich: Der Status quo in Deutschland. Marx / Engels: Werke. Institut Marxismus-Leninismus beim ZK der SED 編、Berlin (Dietz)一九五五年—一九七二年、第四卷。：ドイツの現状、マルクス＝エンゲルス全集、大月書店、一九五九年—一九八一年、第四卷、村田陽一訳。  
 エウリュピネス (Εὐρυπίνης): Βάκχαι. Bibliotheca Teubneriana. Kopff, E. Christian 編、Leipzig (Akademie der DDR)一九八二年。：バックスの信女、キリシヤ悲劇全集、人文書院、一九六〇年、第四卷、松平千秋訳。：Die Mänaden. Tusculum 叢書、Seck, Gustav Adolf 編、München (Heimeran / Artemis)一九七二年—一九八一年、

第五卷' Buschor, Ernst 訳。

Friedrich II. : Der Antimachiavell. Werke. 第七卷' Berlin (Reimar Hobbing) 一九二二年。

Goethe, J. Wolfgang : Wilhelm Meisters Lehrjahre. Werke. Hamburger Ausgabe 依々' München (C. H. Beck / Deutscher Taschenbuch Verlag) 一九八二年' 第七卷' Trunz, Erich 編註。 : ヴェーヘルム・マイスターの修業時代' 全集' 潮出版社' 一九七九年' 一九八二年' 第七卷' 前田敬作 / 今村孝共訳。

Hermann und Dorothea. 上掲' Werke. 第二卷' Trunz, Erich 編註。 : ヘルマンとドロテア' 全集' 人文書院' 一九六〇年' 一九六二年' 第八卷' 国松孝二訳。

Wilhelm Meisters Wanderjahre. 上掲' Werke. 第八卷' Trunz, Erich 編註。 : ヴェーヘルム・マイスターの遍歴時代' 上掲' 全集' 人文書院' 第六卷' 山下啓訳。

West-östlicher Divan. 上掲' Werke. 第二卷' Trunz, Erich 編註。 : 西東詩集' 世界名詩集大成' 第六卷' 平凡社' 一九六〇年' 井上正蔵 / 奥津彦重 / 高安国世 / 手塚富雄共訳。

Faust. 上掲' Werke. 第三卷' Trunz, Erich 編註。 : フォウスト' 世界文学全集' 第二卷' 河出書房' 一九六八年' 高橋健二訳。

Gräßl, Hans : Hölderlin und die Illuminaten. Sprache und Bekenntnis. 所収' Berlin (Dunker & Humblot) 一九七一年。

速水敬二 : <ゲーデルの修業遍歴時代' 筑摩書房' 一九七四年。

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich : Daß die Magistrate von den Bürgern gewählt werden müssen (über die neuesten inneren Verhältnisse Württembergs, besonders über die Gebrechen der Magistratsverfassung). Werke (一八三三年—一八四五年の作品集に依々)。 Modenbauer, Eva / Michel, Karl Markus 共編' Frankfurt am Main (Suhrkamp) 一九六九年—一九七一年 (Register' 一九七九年) 第一卷。 : ヴェルテームベルクの最近の内情について' とりわけ自治体役員制度の欠陥について' 政治論文集' 上巻' 金子武蔵訳註' 岩波文庫' 一九六七年。

Die Verfassung Deutschlands. 上掲' Werke. 第一卷。 : ドイツ憲法論' 上掲' 岩波文庫' 上巻。

Phänomenologie des Geistes. 上掲' Werke. 第三卷。 : 精神現象学' 世界の大思想' 第一卷' 檜山欽四郎訳' 河出書房' 一九七三年。

六五 『パンとぶどう酒』冒頭の都市像(高橋)

(Beurteilung der) Verhandlungen in der Versammlung der Landstände des Königreichs Württemberg im Jahr 1815 und 1816. 上掲' Werke. 第一卷。 : 一八一五年および一八一六年におけるヴェルテームベルク王国地方民会の討論' 上妻精訳' 上掲' 岩波文庫' 政治論文集' 下巻' 一九六七年。

Briefe von und an Hegel. Hoffmeister, J. / Flechsig, R 共編' Hamburg (Felix Meiner) 一九五一年—一九六〇年' 第一卷。

Heidegger, Martin : Der Ursprung des Kunstwerkes. Holzwege. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 一九五〇年。 : 芸術作品のはじまり' 選集' 第十二卷' 菊池栄一訳' 理想社' 一九七〇年。

Wozu Dichter? 上掲' Holzwege: 是しき時代の詩人' 選集' 第五卷' 手塚富雄 / 高橋英夫共訳' 理想社' 一九五八年。

Platons Lehre von der Wahrheit. Gesamtausgabe. Frankfurt am Main (Vittorio Klostermann) 一九七六年来刊行中' 第九卷' Wegmarken (一九一九年—一九六一年)。 : プラトンの真理論' 選集' 第十一卷' 木場深定訳' 理想社' 一九六一年。

Brief über den Humanismus. 上掲' Wegmarken。 : ヒューマンイズムについて' 桑木務訳' 角川文庫' 一九五八年。

Einführung in die Metaphysik. Tübingen (Max Niemeyer) 一九五三年。 : 形而上学入門' 選集' 第九卷' 川原栄峰訳' 理想社' 一九六〇年。

Heine, Heinrich : Die romantische Schule. Säkularausgabe. Berlin (Akademie) / Paris (CNRS) 一九三〇年来刊行中' 第八卷' Francke, Renate 編。 : De l'Allemagne. 上掲' Säkularausgabe. 第十六卷' Pichois, Claude 編。 : ヌーヴィン・ロマン派' 山崎章甫訳' 未来社' 一九六五年。

Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland. 上掲' Säkularausgabe. 第八卷。 : De l'Allemagne depuis Luther. 上掲' Säkularausgabe. 第十六卷。 : ヌーヴィン古典哲学の本質' 伊藤勉訳' 岩波文庫' 一九七三年。

Hölderlin, Johann Christian Friedrich : Sämtliche Werke. Stuttgart Ausgabe Beisner, Friedrich / Beck, Adolf 共編註' Stuttgart (Kohlhammer) 一九四六年—一九七七年。

- Poesie. Vigolo, Giorgio 訳. Nuova Universale Einaudi 第三卷 Torino (Giulio Einaudi) 一九六三年。  
—— Oeuvres, Bibliothèque de la Pléiade Paris (Gallimard) 一九六七年。  
—— 全集、河出書房新社、一九六六年—一九六九年。  
—— Eine Chronik in Text und Bild. Beck, Adolf/Raabe, Paul 共編 Frankfurt am Main (Insel) 一九六〇年。  
—— Sämtliche Werke und Briefe. Meiß, Günter 編註 Berlin (Aufbau) München (Hanser) 一九六〇年。  
—— Sämtliche Gedichte. Lüders, Detlev 編註 Bad Homburg v. d. H. (Athenäum) 一九六〇年。  
—— Sämtliche Werke. Frankfurter Ausgabe. Sattler, D. E./Groddeck, Wolfram 共編 Frankfurt am Main (Roter Stern) 一九七五年來刊行中。  
—— Poems & Fragments. Hamburger, Michael 訳 Cambridge University Press. 一九八〇年。  
—— Wörterbuch zu Friedrich Hölderlin. Stuttgart 版に拠る I. Teil. Gedichte. Tübingen (Max Niemeyer) 一九八三年。  
Honte, Jacques: 知るところへゲル、飯塚勝久／飯島勉共訳、未来社、一九八〇年。  
藤瀬浩司：近代初期ドイツにおける社会経済構造、岩波講座、世界歴史、第十四卷、一九六九年。  
Kant, Immanuel: Betrachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen. Berlin-Akademie 版(一九〇〇年—一九四二年)に拠る Werke. Berlin (Walter Gruyter) 一九六八年、第二卷。：美と崇高の感情に関する考察、全集、理想社、一九六五年來刊行中、第三卷、川戸好武訳。  
—— Was ist Aufklärung 上掲・Werke、第八卷。：啓蒙とは何か、篠田英雄訳、岩波文庫、一九五〇年。  
—— Kritik der Urteilskraft. 上掲・Werke、第五卷。：判断力批判、篠田英雄訳、岩波文庫、一九六四年。  
勝田泰弘：悲歌「パンとぶどう酒」におけるキリストとテオニューズ、関西大学独逸文学会編、一九七四年、独逸文学、十九。  
カトリック大辞典、上智大学編、富山房、一九四〇年—一九六〇年。

- キリスト教大事典、日本基督教議論文書事業部編、教文館、一九六八年。  
キリスト教史、第七卷、啓蒙と革命の時代、上智大学中世思想研究所編、講談社、一九八一年。  
経済学大辞典、東洋経済新報社、一九八〇年。  
小牧健夫：ヘルダーリン研究、白水社、一九五三年。  
Kootz, Wolfgang: Rothenburg ob der Tauber. Heidelberg (König) 一九七八年。  
Kulischer, Josef: モーロッパ、近世経済史、第一卷、東洋経済新報社、一九八二年。  
Machiavelli, Niccolò: 君主論、世界の名著、第十六卷、池田廉訳、中央公論社、一九六六年。  
Mann, Thomas: Buddenbrooks. Gesammelte Werke. Berlin (Aufbau) 一九五六年、第一卷。：ブレンブローク家の人々、全集、新潮社、一九七一年、第一卷、森川俊夫訳。  
Marx, Karl Heinrich: Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844. 上掲・Marx/Engels: Werke、補巻、第一部。：経済学・哲学手稿、国民文庫、第二十七卷、藤野渉訳、大月書店、一九六三年。  
—— Das Kapital. Erster Band. 上掲・Werke、第二三卷。：資本論、第一卷、上掲・マルクス／エンゲルス全集、第三卷、岡崎次郎訳、松田智雄：ドーン資本主義の基礎研究、岩波書店、一九六七年。  
Michel, Wilhelm: Das Leben Friedrich Hölderlins. (Bremen, Carl Schünemann. 一九四〇年) Frankfurt am Main (Insel) 一九六七年複製。  
Michelet, Jules: Histoire de la Révolution française. Bibliothèque de la Pléiade. Walter, Gerard 編註 Paris (Gallimard) 一九五二年。：フランス革命史、世界の名著、第三十七卷、多田道太郎訳、樋口謹一要約、中央公論社、一九六八年。  
Mozart, Amadeus: Don Giovanni. Einstein, Alfred 編、Zürich (Eulenburg) 一九八二年。  
中村善也：ギリシア悲劇入門、岩波新書、一九七四年。  
南原実：Anmerkungen. Das deutsche Gedicht. Schinzingler, Robert 編、第三書房、一九六九年。  
Nietzsche, Friedrich: Die Geburt der Tragödie. Kritische Gesamtausgabe (Coll. Giorgio/Montinari, Mazzino 共編) に拠

- ④ Sämtliche Werke. Berlin (Walter Gruyter) \ München  
 (Deutscher Taschenbuch Verlag) 一九八〇年 第一卷。：悲劇の  
 誕生' 秋山英夫訳' 岩波文庫' 一九七一年。  
 西尾幹二：ニーチェ' 第二部' 中央公論社' 一九七七年。  
 Novalis: Die Lehrlinge zu Sais. Schriften. Samuel, Richard \  
 Kluckhohn, Paul 共編' Leipzig (Bibliographisches Institut)  
 一九二八年' 第一卷。：ザイスの学徒' 全集' 牧神社' 第一卷' 一九七六  
 年' 山室静訳。  
 Die Christenheit oder Europa. 上掲・Schriften. 第一  
 卷。：キリスト教世界またはヨーロッパ' 生野幸吉訳' 筑摩世界文学大系'  
 第七七巻' 一九六三年。  
 大島隆雄：ドイツにおける資本主義の勃興' 岩波講座' 世界歴史' 第十九巻'  
 一九七一年。  
 Pezold, Emil: Hölderlins Brod und Wein. (Sambor 一八九六年—  
 一八九七年) Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft)  
 一九六七年複製。  
 プレーマン (Plátow): Συμπόσιον: Symposion. Boll, Franz 編訳'  
 Buchwald, Wolfgang 改訂' München (Heimeran) 一九六九年。：舞  
 宴' 鈴木照雄訳' 筑摩世界文学大系' 第三巻' 一九五九年。  
 Phaidon, Dirmleier, Franz 編訳' München  
 (Heimeran) 一九六三年。：パイドーン' 池田美恵訳' 新潮文庫'  
 一九六八年。  
 Phaidros. Buchwald, Wolfgang 編訳' München  
 (Heimeran) 一九六四年。：パイドロス' 藤沢令夫訳' 岩波文庫'  
 一九六七年。  
 総索引' 全集 (一九七四年—一九七六年) 別巻' 岩波書店'  
 一九七八年。  
 Quesnay, François: 経済表' 戸田正雄 / 増井健一 共訳' 岩波文庫'  
 一九六一年。  
 Rilke, Rainer Maria: Die Aufzeichnungen des Malte Laurids  
 Brigge. Sämtliche Werke. Rilke-Archiv 編' Frankfurt am  
 Main (Insel) 一九五五年—一九六六年' 第六巻。：マルテの手記'  
 望月市恵訳' 岩波文庫' 一九五七年。  
 Dünser Elegien. 上掲・Sämtliche Werke. 第一巻。：デュ

- ーノの悲歌' 全集' 弥生書房' 一九七三年—一九七四年' 第三巻' 富士  
 川英郎訳註。  
 Rousseau, Jean-Jacques: Discours sur les sciences et les arts.  
 Oeuvres complètes. Bibliothèque de la Pléiade. Paris (Galli-  
 mard) 一九五九年來刊行中' 第三巻' Bouchardy, François 編。：學問  
 芸術論' 全集' 白水社' 一九七九年來刊行中' 第四巻' 山路昭訳。  
 Le Devin du Village. 上掲・Oeuvres complètes. 第二巻'  
 Guyot, Charly 編。：村の占師' 上掲・全集' 第十一巻' 海老沢敏訳。  
 Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité  
 parmi les hommes. 上掲・Oeuvres complètes. 第三巻' Strobinski,  
 Jean 編。：人間不平等起源論' 上掲・全集' 第四巻' 原好男訳。  
 Lettre à M. d'Alembert sur les spectacles. Brunel,  
 L. 編' Paris (Hachette) 一九二一年。：演劇に関するタランヴェル  
 氏への手紙' 上掲・全集' 第八巻' 西川長夫訳。  
 La Nouvelle Héloïse. 上掲・Oeuvres complètes. 第二巻'  
 Coulet, Henri 編。：新ヒロイズ' 安土正夫訳' 岩波文庫' 一九六〇  
 年—一九六一年。  
 Du Contrat Social. 上掲・Oeuvres complètes. 第三巻'  
 Derathe, Robert 編。：社会契約論' 共同訳' 岩波文庫' 一九五四年。  
 Lettres écrites de la montagne. 上掲・Oeuvres complètes.  
 第三巻' Candaux, Jean-Daniel 編。：山かゝの手紙' 上掲・全集' 第  
 八巻' 川合清隆訳。  
 坂井栄八郎：十八世紀のドイツ' 岩波講座' 世界歴史' 第十七巻' 一九七〇年。  
 Sauer, Willis: Rothenburg ob der Tauber —→ Kooztz, W.  
 Schiller, Friedrich: Rousseau. Werke. Nationalausgabe. Weimar  
 (Hermann Böhlaus Nachfolger) 一九四三年來刊行中' 第一巻'  
 Petersen, Julius / Beigner, Friedrich 共編。  
 Die Götter Griechenlandes. 上掲・Nationalausgabe.  
 第一巻。  
 Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universal-  
 geschichte? 上掲・Nationalausgabe. 第十七巻' Hahn, Karl-Heinz  
 編。：世界史とは何か、また何のためにこれを学ぶか' 新聞良三訳' 世界  
 文学大系' 第十八巻' 筑摩書房' 一九五九年。  
 Ueber Anmut und Würde. 上掲・Nationalausgabe. 第一〇巻'

Koopmann, Helmut \ Wiese, Benno 共編。

: Ueber die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. 上掲。Nationalausgabe. 第二〇卷。: 人間の美的教育について。美学芸術論集。石原達一訳。富山房百科文庫。第十一卷。一九七〇年。

: Das Ideal und das Leben. Werke. Fricke, Gerhard \ Göffert, Herbert 共編。München (Carl Hanser) 一九六六年。第二卷。: 理想と人生。小栗孝則訳。世界名詩集大成。第六卷。平凡社。一九六〇年。

: Ueber naive und sentimentalische Dichtung. 上掲。Nationalausgabe. 第二〇卷。: 素朴文学と情感文学について。石原達一訳。上掲。美学芸術論集。

: Ueber das Erhabene. 上掲。Nationalausgabe. 第二十一卷。Koopmann, Helmut \ Wiese, Benno 共編。: 崇高について。小宮敏三訳。上掲。筑摩世界文学大系。第十八卷。

Schmidt, Jochen: Hölderlins Elegie "Brod und Wein". Berlin (Walter Gruyter) 一九六八年。

聖書: Biblia. Novum Testamentum graece et latine.

Nestle, Eberhard \ Nestle Erwin 共編。Stuttgart (Württembergische Bibelanstalt) 一九三〇年。: 新約聖書(希和对訳)。岩隈直編註。山本書店。一九七三年来刊行中。: 福音書。塚本虎二訳。岩波文庫。一九六三年。: Biblia sacra juxta vulgatam Clementinam. Paris 大学神学部編。Paris (Desclée) 一九五六年。: Die Bibel. Lun jr. Martin 訳。Stuttgart (Deutsche Bibelstiftung) 一九七五年。: 新約旧約聖書。日本聖書協会編。一九五四年—一九五五年。

世界歴史事典。平凡社。一九五一年—一九五五年。

ンボクノニス (Σφοδελής): Μυριόβρυχ: Antigone. Tusculum 叢書。Willige, Wilhelm. 編訳。Bayer. Karl 校訂。München (Heimeran) 一九六六年。: マンチエノコネー。ギリシア悲劇全集。人文書院。一九六〇年。第二卷。吳茂一訳。

: Οἰκτρους τύσαντες, Bibliotheca Teubneriana. Dawe, R. D. 編。Leipzig (Akademie der DDR) 一九七五年。: オイデーンス王。藤沢今夫訳。岩波文庫。一九六七年。: König Odipus. Schadowaldt, Wolfgang 編。Insel taschenbuch 15. Frankfurt am Main

(Insel) 一九八一年。

Sugar, L.: Ποιδροτέρηλとリルケ。審美叢書。第五卷。近藤晴彦訳。審美社。一九七二年。

高橋克己: Eine Betrachtung über das "seelige Griechenland" in Hölderlins "Brod und Wein" —— "das große Geschick" als Höhepunkt. 高知大学術研究報告。第二十七卷。一九七九年。

手塚富雄: ヘルダーリン。著作集(第一卷—第二卷)所収。中央公論社。一九八〇年—一九八二年。

Trakl, Georg: Abendland. Historisch-kritische Ausgabe. 第一卷。上掲。Dichtungen und Briefe. Killy, Walter \ Szklener, Hans 共編。Salzburg (Oto Müller) 一九七〇年。

Wackwitz, Stephan: Trauer und Utopie um 1800——Studien zu Hölderlins Elegienwerk. Stuttgart (Hans-Dieter Heinz) 一九八二年。

Wagner, Richard: Die Meistersinger von Nürnberg. Reclam Universal-Bibliothek. Stuttgart (Reclam) 一九六二年。

渡辺寛: ヌイン農業展開過程。経済学全集。第十五卷。農業経済論。筑摩書房。一九六七年。

Wawrzyn, Lennhard: 一八一五年当時の現実と暮らし。信岡資生訳。成城大学経済学会編。経済研究。第七九号。一九八二年。

Weber, Max: 都市。倉沢進訳。世界の名著。第五〇卷。中央公論社。一九七五年。

Weiss, Peter: Hölderlin. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 一九七一年。

山田晶: 中世哲学研究。第一。アウグスティヌスの根本問題。創文社。一九七七年。

Zweig, Stephan: Hölderlin. 《Baumeister der Welt》所収。Frankfurt am Main (Fischer) 一九五一年。: ヘルダーリン。今井寛訳。ソヴァイク全集。第九卷。みすず書房。一九七三年。

(昭和五十八年・一九八三年九月二十六日受理)  
(昭和五十九年・一九八四年三月十日発行)



eingeschlagen, sondern ein Umweg gemacht werden soll, mit dem das damalige Stadtbild Europas noch genauer bestimmt werden kann. In der Zeit war Deutschland eine stabile Gesellschaft, die größtenteils von der Landwirtschaft abhing, und noch keine dynamische bürgerliche Gesellschaft, in der die Stadtwirtschaft vorwiegt wie heute. Auf der Basis dieser „überwiegenden Bedeutung des Ackerbaus“ (Engels „Der Status quo in Deutschland“ 1847) vom 18. „Ökonomischen Jahrhundert“ (Abel „Die drei Epochen der deutschen Agrargeschichte“ 1962), überlebten die feudalen Privilegierten. So blühte in der Zeit präziös und schmuckvoll die höfische „Kultur der Oper“ in mit glänzenden Kronleuchtern illuminierten Räumen, z. B. im Opernhaus der Residenzstadt Stuttgart, auf der das Stadtbild von „Brod und Wein“ beruht. Der zweite Vers der Gedankenlyrik lautet: „Und, mit Fackeln geschmückt, rauschen die Wagen hinweg“. Im Vergleich mit den gewöhnlichen Bürgern, die „gehn heim . . . . . zu ruhen“ (V. 3), stelle ich mir im zweiten Vers die Privilegierten vor, die mit den hinwegrauschenden fackelgeschmückten Wagen zur Abendgesellschaft im Salon oder Opernhaus eilten, und beachte den Ausdruck: „hinweg“. Hieraus lese ich den Blick des Dichters ab, der die bestehende privilegierte „Kultur der Oper“ (Vgl. Nietzsche „Die Geburt der Tragödie“ 1872) verneint und sich auf einen neuen freieren Raum der künftigen Feier richtet. In diesem Zusammenhang erscheint das „seelige Griechenland“ („Brod und Wein“ V. 55) als Zeitraum des „himmlischen Festes“ (V. 108), „wo tönet das große Geschik“ (V. 62) im Festspielraum der klassischen Tragödie. Dieser freie und offene Raum vom antiken Festspiel, das in der hellenischen „lieblichen Bläue“ (StA 2.372) vom ätherischen Himmel im offenen Freien des Sonnentags stattfand, steht offensichtlich in auffallendem Kontrast zu jenen mit präziösen und kunstvollen Kronleuchtern illuminierten geschlossenen Räumen des europäischen Salons und Opernhauses. Darauf beziehe ich auch „Sur les spectacles“ (1758) von Jean-Jacques Rousseau, den Hölderlin in der Hymne „Der Rhein“ (Str. 10-11) und der Ode „Rousseau“ als heroischen Seher der Zeit feierte, so daß ich den „Gemeingeist“ (StA 2.334) der republikanischen Feier und den exklusiven Charakter der höfischen Kultur der Oper „auf gut Rousseauisch“ (Kant „Kritik der Urteilskraft“ 1790) analysieren kann.

Als Dokument der Zeit benutze ich die Kritik an den Privilegierten im politischen Aufsatz „Über die neuesten inneren Verhältnisse Württembergs“ (1798) vom Freund des Dichters, Hegel, der die „Anmaßung der höheren Offizialen“ vom Kleinen Ausschuß der Stuttgarter Landschaft anprangerte, die zwar eigentlich „seine Konsulenten und Advokaten waren“, sich jedoch eng mit dem Württembergischen Hof liierten. Bemerkenswerterweise hält Hölderlin den Glanz von den präziösen und schmuckvollen Kronleuchtern und Fackeln der Privilegierten für einen „hinwegrauschenden“ (V. 2) Vergang und stellt dagegen die spärlich „erleuchtete Gasse“ (V. 1) voll bescheidener Zärtlichkeit als Sinnbild des städtischen Innenraumes mit wärmster Herzlichkeit dar.

## Zum Verständnis meiner Arbeit

Hölderlins umfangreiche Gedankenlyrik „Brod und Wein“ (1800-01) befaßt sich zwar mit komplizierten Problemen der abendländischen Geistesgeschichte, aber in der Einleitung vom Gedicht stellt der Dichter scheinbar so sehr alltägliche Vorstellungen dar, daß die bisherige Forschung sich mit diesen anfänglichen Versen kaum beschäftigt hat. Dafür ist ein Beispiel die repräsentativste Arbeit über dieses Gedicht nach dem zweiten Weltkriege: Hölderlins Elegie „Brod und Wein“ von Jochen Schmidt (1968). Während er den ganzen hundertsechzig Versen vom Gedicht ungefähr hundertfünfzig Seiten widmet, legt er die anfänglichen sechs Verse nur gut auf einer Seite (S. 34-35) aus. Wenn es auch denkbar sein mag, daß dem gedankenreichen und schwerverständlichen Inhalt von „Brod und Wein“ die alltägliche Wirklichkeit vom Anfang des Gedichtes kaum Sinn gibt, habe ich mich dennoch auf die selbstverständlichen Bilder vom Anfang konzentriert und sie im Zusammenhang mit dem Inhalt des gedankenlyrischen Gedichtes überlegt, so daß ich verschiedene Fragestellungen fand, die in schlichter Gestalt in dieser lyrischen Einleitung angeführt wurden. Im ersten Vers von „Brod und Wein“ schlägt der Innenraum der Stadt in der abendlichen Dämmerung, das Tor zum Weg in die Gedankenwelt der Lyrik auf. Hier wählt der Dichter schon einen der gedanklichen Besinnung entsprechenden Innenraum.

In der Erörterung dieses Stadtbildes möchte ich hier die damalige historische Situation Europas um 1800 berücksichtigen und damit das Weltbild der Lyrik in Übereinstimmung mit ihrer Gestalt, Form, Stimmung und Weise erläutern. Aber dabei sind biographische Studien über Hölderlin wie z. B. „Das Leben Friedrich Hölderlins“ von Wilhelm Michel (1940) leider nicht sehr hilfreich, weil hier meistens zwar des Dichters privater Lebenslauf oder die damalige politische Situation, aber wider Erwarten weder konkretes Beispiel vom alltäglichen Leben der Zeit, noch seine wirtschaftliche Begründung berücksichtigt wird. Daher möchte ich hier die Ergebnisse der wissenschaftlichen Arbeit über die Agrar- und Wirtschaftsgeschichte einbeziehen, um folgendes zu überlegen: in welcher Lage waren die Städte und Dörfer Deutschlands in der Zeit um 1800, wo „Brod und Wein“ entstand; welche Unterschiede bestanden zwischen den Städten und Dörfern je nach dem Land; welche Entwicklungsstufe der Produktionsweise erreichte damals die deutsche Gesellschaft, die in der industriellen Revolution hinter anderen fortgeschrittenen Ländern zurückblieb. Zum Beispiel weise ich auf das Problem der nächtlichen Beleuchtung hin („Brod und Wein“ V. 1-2): Im gesellschaftlichen Salon der Privilegierten hingen Kronleuchter mit glänzenden Wachskerzen, die zu teuer und zu präziös für die gewöhnlichen Bürger waren; bei diesen wurden Zimmer wie Gasse von Öllampen oder Talglichtern spärlich beleuchtet.

Solche historischen Untersuchungen sollen hier nicht Selbstzweck werden, sondern dem Gang der Gedankenlyrik folgen, um ihre dichterische Welt zu erhellen. Der Anfang dieser Arbeit behandelt die Umgebung der Stadt, damit kein Abweg